本書について

本書は、平成二十八年度文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした地方活性化事業）に八戸市として応募・採択された「八戸市の文化遺産を活用した地域活性化事業にて、事業実施団体である「あおもりデジタルアーカイブ・コンソーシアム（略称：ＡＤＡＣ）」が作成した普及啓発資料です。

平成二十八年十二月に八戸の宝である『八戸三社大祭』が、国際連合教育科学文化機関（ＵＮＥＳＣＯ）の無形文化遺産に「山・鉾・屋台」の巡行を中心とした全国三十三件本州では最北、青森県で唯一、祭礼行事として登録されました。そこで、屋台でもある豪華絢爛な山車に焦点をあて、先人から脈々と受け継がれた歴史や伝説を、山車ものがたりとして判り易くまとめました。

地域において世代を超えた多くの人々の間で、対話と交流が促進されること、それとともに八戸の伝統文化芸能をこれから担っていく後世に大切に受け継ぎ、しっかりと次代へ繋いでいく一助となることを願っております。

平成二十九年二月

あおもりデジタルアーカイブ・コンソーシアム

会長　長谷川　明

まえがき

今回ユネスコ無形文化遺産登録を果した三百年の歴史と伝統を誇る八戸三社大祭の山車行事であるが、今では、豪華絢爛な山車が主役だと言って良いであろう。

江戸時代の山車は人形のみを主体としたもの、自然の山や岩、波などを飾りとしたものが多かった。明治期に入ると歴史や伝説などを再現した風流山車に移行していくが、どの型の山車も一つ一つ意味合いが有り、ものがたりがそこに存在している。

人形師や山車製作者は、製作する題材の内容、解説を把握してその作品に魂を込め構想を組み立て進めていく。人形一体、波板一枚、造花一輪、形、色彩に思い入れが現われているのである。

そうなると、観る側もその完成した山車を理解して鑑賞することによって作者の意図が分かり、より感動が深くなり、祭りを一層楽しめると思うのである。

小生が幼い頃、祭りの前夜に、今は亡き母が新聞に載ってくる参加山車組の解説、すなわち山車ものがたりを絵本を読むように語り聞かせてくれた。幼いながらも山車の内容がある程度解って山車を見物するのであるから、年を追うごとに興味が深くなり、山車の絵を描いたり、山車の模型を作ったりの毎日となっていった。私の祭りに携わるようになった原点といえよう。

日本三大祭りのうちの江戸、神田明神の神田祭、日枝神社の山王祭の両祭りは、天下祭りとして数多くの山車が奉納された。参加全山車が番付（ばんづけ）といわれる山車の完成図が作られ、日本全国の山車の教科書のようなものになった。

盛岡を中心とした岩手県内でも今も番付が作られているが、八戸では製作者とスタッフのみで使われる絵紙（えがみ）と呼ばれるものが数少なく描かれている。

現在のような大型化し、複雑な構図の風流山車となってきた昭和五十年に三社大祭やえんぶり等に詳しい八戸市博物館初代館長で郷土史研究家であった故正部家種康先生は、山車の完成図面を山車絵図と名付けて推進した。人形を飾った屋台型から風流山車に移行した明治期から、大正、昭和、そして平成と日本一の山車祭りと呼ばれるようになった八戸三社大祭の山車をより深く理解するために、今回、明治からの古典的な山車、珍しい山車の山車ものがたりを集めてみた。

併せて、小生は今年で山車製作責任者として四十一年目となるのだが、その間描いた山車絵図の中から抜粋して山車繪図帳としてみた。

先人から引き継ぎながら毎年新たな創意と工夫を凝らして製作される八戸型の山車をより深く興味を持ち後世に繋いでいって欲しいものである。

平成二十九年二月

山車繪師　夏　坂　和　良

八戸三社大祭
明治からの山車ものがたり

夏坂和良

明治二十五年（一八九二）

【廿八日町】

珊瑚樹（さんごじゅ）

珊瑚（さんご）は、刺胞動物門花虫網に属する動物のうち、固い骨格を発達させるものである。宝石になるものがあり、宝物の一つに数えられる。山車は宝物を誇張し製作することが古来から有り、豪華で美しい珊瑚のみを台車に製作したものである。

【浦山政吉】

四季苍（しきのはな）　砂ノ物（すなのもの）

砂の物（すなのもの）とは、生け花の形式のひとつ。砂鉢に木の株を立てて、砂を入れ固定するもの。違い棚の下の重（じゅう）から床の門に進出した。すなわち、四季の苍（花）を砂ノ物形式に飾ったもの。花車屋台風の山車。

【八日町】

曲乗三番（きょくのりさんば）

日本の伝統芸能、三番叟（式三番叟）で翁の舞いに続いて舞う役。能楽では狂言役者が演ずる。その三番叟が曲乗り（曲芸）をしている祝舞いの場と思われる。

【三日町有志】

鞍馬山（くらまやま）

京都、鞍馬山には天狗が住むという。鞍馬天狗が有名。鞍馬山の奥僧正が谷に住む大天狗鞍馬僧正坊、牛若丸（のちの義経）に剣術を教えたという伝説で知られる。鬼一法眼（きいちほうがん）と同一視される。

【鍛冶丁（鍛冶町）】

松前鉄之助（まつまえてつのすけ）

歌舞伎の「伽羅先代萩（めいぼくせんだいはぎ）」は江戸前期に実在する仙台藩の御家騒動を取材した人気脚本。

悪の張本、仁木弾正はネズミの妖術を使う。それを袴姿で大ネズミを踏み倒す「松前鉄之助」鉄扇を振りかざして見得をきる正義のみかた。荒事歌舞伎の勇姿。

【十三日町】

五條橋（ごじょうのはし）

有名な京都五條の橋の上、牛若丸と弁慶の出合い場。乱

暴者の弁慶は千本の太刀を奪おうと祈願を立て、道行く人を襲っては太刀を奪い取り九九九本までとなった。
そしてあと一本というところで、五條大橋を笛を吹きながら通る牛若丸と出合うのである。
弁慶は牛若丸に襲いかかるが、牛若丸は欄干を飛び交い、最後は返り討ちに遭ってしまう。降参した弁慶はその後牛若丸の一生涯の家臣となった。

明治二十九年（一八九六）

【廿六日町】

諫鼓鶏（かんこのとり）

中国の伝説上の聖天子、堯、舜、禹がその施政について諫言しようとする人民に打ち鳴らさせるために朝廷も門外に太鼓を設けた。この太鼓を諫鼓（かんこ）と呼ぶ。
しかし、善政を行ったので太鼓は鳴ることもなく永年の間に苔むし鶏の格好の遊び場となっていたという。
諫鼓に鶏が止まっているのは世の中がうまく治まっていること「天下泰平の象徴」であるという事である。
太鼓に乗る鶏、全国的に山車の題材となる。

明治三十四年（一九〇一）

【塩町】

大天狗（だいてんぐ）

鞍馬山に住むという鞍馬山僧正ヶ坊大天狗。鞍馬天狗とも呼ばれ、牛若丸に剣術を教えたと伝わる。鬼一法眼とも伝えられる鞍馬山の天狗の総師。

【鍛冶町】

鬼若丸鯉退治の様（おにわかまるこいたいじのさま）

武蔵坊弁慶の幼名、鬼若丸。
比叡山西塔に預けられ、西塔鬼若丸と呼ばれた。鬼若丸は母親の胎内に十八ヶ月、生まれた時は髪・歯が生え揃っていたといわれる。
弁慶一代記で子供に害をなす比叡山横川の池の巨大鯉を鬼若丸一人で退治し、僧達を驚かしたと伝わる鯉退治の場。

【朔日町】

布袋唐子遊び（ほていからこあそび）

唐末の明州に実在したとされる伝説的な仏僧。大きな袋

を背負い、太鼓腹の僧侶の姿で七福神の一柱。福の神である布袋和尚が唐子（中国の子供）達と楽しく戯れる場面。

【十六日町】

加藤清正（かとうきよまさ）

加藤主計清正は、大職冠藤原鎌足の子孫にあたる。加藤弾正左衛門清忠の子で幼名を虎之助といった。尾張の国に生まれる。幼い頃から秀吉に仕え、十四才の初陣に手柄を立て敵や味方を驚かした。

成長するに及んで各戦（いくさ）で活躍し、朝鮮出兵でも戦功は数え切れなく、遠く朝鮮や中国にまでその名をとどろかせた。英勇、忠良の豪傑である。特に虎退治は有名である。

【十六日町】

大鯛（おおだい）

鯛（たい）とは、広義にはスズキ目タイ科の総称、狭義にはタイ科のマダイを指す。

また、鯛はめでたい等縁起物に例えられ、福の神の一柱恵比寿様も抱いている。祝いの席にも登場する魚。

山車に縁起の良い活き活きとした大きな鯛を飾ったもの。

【大工町】

桃太郎（ももたろう）

日本のおとぎ話の一つの主人公。

川から流れてきた大きな桃から生まれた男の子、お婆さんから黍団子（きび）を貰って、イヌ、サル、キジを家来にして悪い鬼の住む鬼ヶ島まで鬼を退治しに行く物語。

【十三日町】

足柄山楠木父子（あしがらやまくすのきおやこ）

楠木正成（まさしげ）父、楠木正行（まさつら）子が決別する逸話。太平記による「桜井の別れ」は有名である。戦にて死を覚悟した父正成は、数え十一歳の嫡子正行を呼び「最期まで父上と共に」という正行に今後の一族の事を託し、菊水の紋が入った短刀を渡し、別れを告げるのだった。

【廿三日町】

素盞嗚尊大蛇退治（すさのおのみことおろちたいじ）

日本の神話の一つ。

高天原を追われた素盞嗚尊は、クシナダ姫と共に泣き悲しむ老夫婦に会う。聞けば八人の娘だったが毎年ヤマタノオロチという、頭が八つ、尾が八つのオロチが最期の一人

のクシナダ姫を食らうに来るという。それを聞いた素盞嗚尊は、つよい酒の入った瓶を用意し、酔わせて退治したと伝えられる。

【廿八日町】

大黒（だいこく）

ヒンドゥー教のシヴァ神の化身であるマハーカーラのこと。

仏教の大黒天、密教の大黒天が元になり出来た仏教の天部に属する神。神道の大黒天と密教の大黒天が元となり、大国主命と神仏習合して出来た神道の神、大きな袋、宝が出る打ち出の小槌を持ち、招福の神、七福神の一柱である。

【八日町】

一ノ谷雛鳥超（いちのたにひよどりごえ）、畠山義経馬上の様（はたけやまよしつねばじょうのさま）

※雛鳥ではなく鵯鳥と思われる

源平合戦一の谷の戦い。平家の陣の裏手のとてつもない崖一の谷。

鹿が谷を下りるのを見た源義経は、鹿も四つ足、馬も四つ足、下れない訳がないと奇襲攻撃を強行した（鵯越えの逆落とし）。

馬に乗って義経は崖を下る。畠山重忠は愛馬三日月を思い、背負って崖を下ったという。義経騎馬軍団は次々と崖をかけ下ったその場面。

【三日町】

楠公（くすのきこう）の像（ぞう）

皇居前広場の二重橋にある楠公の像。鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての武将。

後醍醐天皇を奉じて鎌倉幕府妥当に貢献し、足利尊氏らと共に天皇を助けた。大楠公と称され明治十三年に正一位を追贈された。鎧兜に身を固めた勇ましい馬上姿の大楠公の像。

明治三十五年（一九〇二）

【朔日町】

浦島太郎（うらしまたろう）

日本のお伽話の一つ。日本各地にある竜宮伝説の一つ。

漁師の浦島太郎は、子供達が亀をいじめているところに遭遇する。太郎が亀を助けると、亀は礼として太郎を竜宮城に連れて行く。竜宮城では、乙姫（東海竜王の娘、竜女）

が太郎を歓待する。
しばらくして太郎が帰る意思を伝えると、乙姫は「決して開けてはならない」としつつ玉手箱を渡す。
太郎が浜に帰ると、知っている人は誰もいない。太郎が玉手箱を開けると、煙が発生し老人になってしまう。太郎が竜宮城で過ごした日々の数日は、地上ではずいぶん長い年月が経っていた。

【鍛冶町】

岩見重太郎（いわみじゅうたろう）

豪傑岩見重太郎が諸国を漫遊しながら各地で狒々や大蛇を退治し、父の仇を宮津の天橋立で討ったという。
講談で各地に残る豪傑伝説と結びついた。また、戦国時代の武将、薄田兼相（すすきだかねすけ）と同一視される。

【十六日町】

熊谷敦盛（くまがいあつもり）

一の谷の戦いで源氏に敗れた平氏は、船で海へ逃げる。源氏の武将、熊谷次郎直実（くまがいじろうなおざね）が馬を走らせていると、立派な武将が船を目指して馬を泳がせていた。直実が後から声をかけると、その武者は正々堂々と引き返してきた。直実はとりおさえ首を切ろうとしたが、よく見ると自分の子供と同じくらいの十六、十七歳ぐらいの美少年であった。直実は涙をこらえ討ち取ったという。
熊谷直実、平敦盛の場面。

【六日町】

金時（きんとき）

坂田金時（さかたのきんとき）＝金太郎。
出生の伝説は、母親が山姥で、父親は雷神、赤龍とも言われ、金時山の頂上で赤い龍が八重桐（山姥）に授けた子ともいわれる。
足柄山の怪童とも呼ばれ、熊と相撲を取ったりする力持ち。昔話や童話にもなっている。まさかりを担ぎ、熊に乗った姿が人気。
のちに源頼光の家来となり、四天王といわれ、大江山の鬼や妖怪蜘蛛を退治したと伝わる。

【廿三日町】

日本武尊（やまとたける）

第十二代景行天皇の子、幼名は小碓命（おうすのみこと）。双子の大碓命（おおうすのみこと）を誤って殺してしまう。その後、熊襲征討・東国征討を行ったとされる。日本古代史上の伝説的英雄。最期は白鳥になって昇天したと伝えられる。

【二十八日町】

神鏡（しんきょう）

神社等の御神体、鏡神霊鏡（かがみ）。神聖な鏡という意味。神鏡のみを飾りたてた古典的な山車。

【八日町】

川中嶋（かわなかじま）

戦国時代、甲斐の国武田信玄（武田春信）と越後の国上杉謙信（長尾景虎）との間で、北信濃の支配権をめぐって行われた教次の戦を川中島の戦いといい、最大の激戦となった四次の戦いが千曲川と犀川が合流する三角状の平坦地である場所を中心に行われた。

馬上から切りかかる上杉謙信、それを軍配で打ちはらう武田信玄の場。

【三日町】

羅生門（らしょうもん）

羅城門（らじょうもん）とも呼ばれる。

平安京の正門、羅生門に巣食っていたといわれる鬼の伝説。平安時代の謡曲「羅生門」などに登場する。

源頼光が大江山で討伐した後、頼光四天王と平井保昌が宴をしていたところ、羅生門に鬼が出ると言い出した。四天王の一人、渡辺ノ綱は一人で確かめに鎧兜と先祖伝来の太刀で武装して馬に乗り向かった。

羅生門に着くと急に激しい風に見舞われ、背後から現われた鬼に兜をつかまれた。網はすかさず太刀で鬼の片腕を斬り落とした。鬼は「時節を待ちて腕取り返す」を叫んで、空に覆う黒雲の彼方へ消えて行ったという。

明治三十九年（一九〇六）

【廿六日町】

楠公父子訣別（くすのきこうおやこけつべつ）

楠木正成（まさしげ）父、楠木正行（まさつら）子が決別する逸話。太平記による「桜井の別れ」は有名である。戦にて死を覚悟した父正成は、数え十一歳の嫡子正行を呼び「最期まで父上と共に」という正行に今後の一族の事を託し、菊水の紋が入った短刀を渡し、別れを告げるのだった。父楠木正成は大楠公、子楠木正行は小楠公と讃えられた。

【朔日町】

八百屋お七の櫓に登る像

江戸時代前期、江戸本郷の八百屋の娘でお七という。恋人に会いたい一心で放火事件を起こし、火刑に処されたとされる少女。天和の大火で焼け出され、お七は、親とともに正仙院に避難した。寺で会った寺小姓の生田庄之介と恋仲になる。やがて店が建て直され、お七一家は寺を引き払ったが、お七の庄之介への思いは募るばかり。そこでもう一度自宅が燃えればまた庄之介と暮らせると放火をした。炎の中、庄之介に会いたい一心に櫓に登り、半鐘を打ち鳴らす有名な場面。のちに井原西鶴の文芸や芝居の題材となった。（三社大祭の行列では、表通りを通る山車は、裏通りからお七の人形が見えたといわれるほど巨大な山車だったようだ。）

【鍛冶町】

岩見重太郎の蛇を退治せんとする所

岩見重太郎という豪傑が諸国を漫遊しながら各地で狒々や大蛇を退治し、父の仇を宮津の天橋立で討ったという伝説を戯曲、小説、講談等で全国的に有名となった豪勇伝の主人公。

戦国武将の薄田兼相だとも伝えられる。村人を悩ませる大蛇を退治する場面。

【十六日町】

辨慶の釣鐘を上げ居る所

その昔、三井寺が延暦寺と争った際、比叡山の荒法師、武蔵坊弁慶が三井寺の梵鐘を奪い、一人で比叡山の山上まで引き摺り上げ撞いてみると「いのー、いのー、（関西弁で帰りたい）」と響いたので「そんなに三井寺に帰りたいのか」と谷底へ投げ捨てたと伝えられる。

その釣鐘は、田原藤太秀郷が三上山の大ムカデ退治のお礼に琵琶湖の龍神より頂いた釣鐘と伝えられる。

山車は豪力の辨慶の引き摺鐘の場。

【六日町】

廿四孝

中国において後世の範として、孝行が特に優れた人物二十四人を取り上げた書物である。

儒教の考えを重んじた歴代中国王朝は、孝行を特に重要な得目とした。日本にも伝来し、仏閣等の建築物、人物図などに描かれている。また、御伽草子や寺子屋の教材にも採られている。

明治四十年（一九〇七）

【廿六日町】

天の岩戸（あまのいわと）

日本の神話。天照大神（アマテラスオオミカミ）が弟の素戔嗚尊（スサノオノミコト）の乱暴を怒って天の岩戸へ隠れてしまい、世の中は真っ暗闇になってしまった。いろいろな悪い神々が出て恐ろしいことや悲しいことが次々と起こったので、大勢の神様達が集まり、会議を開いた。「何とかしないと」と戸隠神社の天八意思兼命（アメノヤゴコロオモイカネノミコト）が岩戸の前で私達が踊ったり、歌ったり楽しそうにして、天照大神様があの者たちは何をしているのだろうとのぞきになったところを天手力男神（アマノタヂカラオノミコト）が岩戸を開ける段取りを考えた。さて本番、鶏を沢山集めて鳴かせ、天宇受売命（アメノウズメノミコト）が踊り、「やんや」の手拍子、楽しそうな笑い声に天照大神はそっと岩戸を開けて外をご覧になった時、岩戸を一気に開き天照大神様を外に出し、この世はまた明るい世の中になったのである。

【十一日町】

連隊旗を持せる軍人（れんたいきをもたせるぐんじん）

連隊旗＝軍旗（ぐんき）、大日本帝国陸軍の軍旗を持つ勇ましい軍人の場面。

国旗である日章旗に準じ、日章は中心に位置し、十六条の光線を放つ。海軍はその陸軍に遅れること十九年後の明治二十二年（一八八九年）に制定した。軍旗は五芒星や桜星とともに明治最初期から使われている。（※おそらく、山車ではなく仮装と思われる。）

【朔日町】

近藤重蔵（こんどうじゅうぞう）

近藤重蔵は江戸時代後期の幕臣、探検家。号は正斎、昇天真人。間宮林蔵や平山行蔵と共に〝文政の三蔵〟と呼ばれる。明和八年（一七七一年）、御先手組与力・近藤右膳守知の三男として江戸、駒込に生まれる。山本北山に儒学を師事。

幼児の頃から神童と言われ、十七歳で私塾「白山義学」を開くなど、並々ならぬ学才の持主であった。生涯、六十余種一五〇〇余巻の著作を残している。

【鍛冶町】

平親範（たいらのちかのり）

平安時代末から鎌倉時代前期の公卿。桓武平氏高棟王流、従三位、平範家の嫡男。蔵人頭、参議、左中弁を経て、承安元年（一一七一年）正三位、民部卿に叙任される。承安四年（一一七四年）大原極楽院にて出家。戒師は「来迎院縁忍」とし、法名は「相蓮房田智」という。

建保二年（一二一四年）には出雲寺を再興、平家由来の平等、尊重、護法の三寺を併せた堂を建立し、私領を寄進した。

【十六日町】

大石蔵之助（おおいしくらのすけ）

大石内蔵助＝大石良雄。有名な忠臣蔵、赤穂浪士の主役。江戸時代前期の武士。播磨国赤穂藩の筆頭家老。

赤穂討ち入り事件で名を上げ、これを題材とした人形浄瑠璃・歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」が出来上がった。

「良雄」は諱で通称（仮名）は「内蔵助」。本姓は藤原氏。家紋は右二ツ巴。

【六日町】

小島高徳（こじまたかのり）

児島高徳。鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて活躍したとされる武将。従五位下、備後守を賜る。元弘元年（一三三一年）元弘の乱、後醍醐天皇に対して忠勤を励み、南北朝分裂後も一貫して南朝側に仕えた。

江戸時代以降、南朝の忠臣として讃えられ、国民的英雄のひとりとなる。特に有名な場面は後醍醐天皇が隠岐に配流される途中、救出を企てるが果せず、せめて自分の覚悟を知らせたいと宿所に潜入し、庭の桜の木を削って詩句を書きつけたという。

〝天勾践を空しゅうすることなかれ。時に范蠡なきにしもあらず〟（天よ。どうか後醍醐天皇をお見捨てなきよう。天皇も范蠡のような忠臣がここにおりますことをお信じください。）

【廿八日町】

小野道風（おののとうふう）

平安時代の貴族・能書家。藤原純友討伐に功を成した公卿。

自分の才能のなさに自己嫌悪に陥り悩んでいた時、柳に飛びつこうとする蛙を見て「蛙はバカだ。いくら飛んでも

飛びつけるわけがない」とバカにした時、偶然にも強い風が吹き、柳がしなり、見事に飛び移れた。それを見た道風は「バカは自分だ。蛙は一生懸命努力をして偶然を自分のものとしたのに、自分はそれほどの努力もしていない」目の覚める思いをした。その後、血の滲む努力をするきっかけとなったという。

この逸話が多くの絵画等の題材となった。

明治四十一年（一九〇八）

【十一日町】

鎧武者（よろいむしゃ）

（※おそらく仮装と思われる）

【朔日町】

武者二騎（むしゃにき）

（※おそらく仮装と思われる。）

【鍛冶町】

浦島太郎（うらしまたろう）

（※前記と同じ）

【十六日町】

猩々舞（しょうじょうまい）

猩猩は古典書物に記された架空の動物。各種芸能で題材にもなっており、特に能の演目である五番目物の曲名「猩猩」が有名。真っ赤な能装束で飾った猩猩が酒に浮かれながら舞い踊る。祝言能。

昔、揚子江に親孝行者の高風（こうふう）という男が住んでいた。神夢のお告げに従い市場で酒を売る。酒を買いに来る客の中にいくら飲んでも顔色ひとつ変わらない者がいた。不思議に思った高風が名を尋ねると、自分は猩猩と言う海中に住む者だと答えて立ち去る。

そこで高風は月夜の晩、川辺で酒を用意して待っていると、水中から猩猩が現われ、共に酒を酌み交わし舞い踊った。やがて猩猩は高風の親孝行の得を褒め、泉のように尽きる事のない酒壷を与えて帰ってゆくのであった。

【六日町】

八幡太郎（はちまんたろう）

八幡太郎源義家。平安時代後期の武将。伊予守源頼義の長男。後に鎌倉幕府を開いた源頼朝、室町幕府を開いた足利尊氏などの祖先。幼名は不動丸、または源太丸。七歳の春に山城国の石清水八幡宮で元服したことから八幡太郎と

称す。

比叡山等の強訴の頻発に際し、その鎮圧や白河天皇の行幸の護衛に活躍する。陸奥国守となった時、清原氏の内紛に介入した。後三年の役を起こす。

明治四十二年（一九〇九）

【廿六日町】

日本武尊（やまとたける）　熊襲討伐（くまそとうばつ）

日本武尊（ヤマトタケル）は十二代景行天皇の子として誕生した。幼名を小碓命（オウスノミコト）といい、双子の兄、大碓命（オオウスノミコト）を殺害してしまったため、父から疎んじられていた。

小碓命が十六歳の時、父景行天皇は九州の熊襲を平定するよう命じた。熊襲建（クマソタケル）兄弟は武勇に秀でていたが、大王の命に従おうとしないので征伐することとなった。熊襲建は大きな御殿を新築したばかりで祝いの宴が催されていた。小碓命は女装して舞手として宴に紛れ込み、酒を飲んで上機嫌の熊襲兄弟を討伐した。熊襲弟は死に際に、自分よりも強いものはいないと思っていた。倭（ヤマト）にいたのか。自分達の「建」（タケル）の名をもらってほしいと言い死ぬ。小碓命はこれより倭建命（ヤマトタケル）と名乗ることにした。

「建」は勇敢な者という意味を持つ。

【十一日町】

渡辺綱（わたなべのつな）

平安時代中期の武将。嵯峨源氏の源融の子孫で正式には源綱（みなもとのつな）。通称渡辺源次。源頼光四天王の筆頭として知られる。渡辺氏の祖。武勇に優れ、美男子で光源氏の実在のモデルであったと伝えられる。

大江山の酒呑童子退治や京都の一条戻橋の鬼、羅城門の鬼の腕を源氏の名刀「髪切りの太刀」で切り落とした逸話で有名である。

【朔日町】

宇治川（うじがわ）　先陣（せんじん）

宇治川の戦い。平安時代末期の寿永三年（一一八四年）一月、源義仲と鎌倉、源頼朝から派遣された源範頼、源義経との合戦。

宇治川激流を前に義経の言葉を受け、畠山重忠が五千騎で鐙を並べた。その時、二騎の武者が駆け付けてきた。梶原景季と佐々木高綱だった。景季は高綱に一歩先んじて川に馬を進ませた。高綱は「いかに梶原殿、この川は西国一

の大河。腹帯がほどけているように見えます。お締めください」と声をかけた。景季が馬の腹帯を直している間に脇を抜けて川へ入った。景季は、はばかられたと思った。すぐに続いて馬を川へ入れた。高綱の馬は生食天下一の馬、景季の馬は磨墨という名馬で、共に南部、七戸、三戸産の名馬であったと伝えられる。

佐々木高綱宇治川先陣争いの場。

【鍛冶町】

成田山御利生記　桂川力蔵　神願の圖

本題は、檜太鼓成田仇討。十代目市川海老蔵が演じて以来お目にかからない珍しい狂言。

力士の芝居で、以前師匠殺しをした相撲取、滝見山は卑劣な手で雲の戸十右衛門を土俵で殺す。雲の戸の遺児は桂川力蔵と名乗り、父の仇を討つため成田山で断食修行の後、神の加護で宿願を果す。

成田の仇討といわれる市川家と成田山との結びつきでの筋となっている。

【十六日町】

村上義光　錦旗を取返しの圖

村上義光。鎌倉時代末期の武将。大塔宮護良親王（後醍醐天皇の皇子）の忠臣として知られる。

南都（奈良）から親王が熊野へと逃れる際、現在の十津川村にある芋瀬を通過しようとした時に芋瀬の庄司より「ここを通りたくば錦の御旗か、もしくは家臣のいずれかを人質として置いていくかどちらか選べ」と迫られた親王は、一人でも人材を失うのは痛いと考え、やむなく錦旗を庄司の一党に渡してしまった。遅れて来た村上義光は、錦旗を持って戻ってきた庄司らの一党を見て問い詰め、事情を知り打ち倒し、錦旗を見事に奪い返したといわれている。

明治四十三年（一九一〇）

【廿六日町】

桃太郎　鬼ヶ島引揚

御伽話。桃から生まれた桃太郎。犬、猿、雉をお供に鬼ヶ島へ悪い鬼を退治しに行きました。桃太郎達と鬼達の戦いです。その後、鬼達は「もう悪い事はしない」と謝り降参しました。

宝物を船に積んだ桃太郎達は桃の紋の帆を上げ鬼ヶ島を引揚、凱旋するのでした。

【十一日町】

義経八艘飛び

源平合戦最大の戦い、壇ノ浦の合戦。本来海軍である平家が有利であったが、源氏の大将、源義経はこの逆境を跳ね返すべく敵船の漕ぎ手を次々と射殺した。この奇策で戦況は一変した。平家の猛将、平教経は今度こそは義経を、と組みかかった。義経はこの怒涛の追跡を軽やかな身のこなしで、なんと重い鎧兜を着けて八艘の船を飛び回ったという。潮の流れも義経に味方して、源氏は大勝利を収めた。

源九郎判官義経　八艘飛びの名場面。

【朔日町】

滑川の青砥藤綱

青砥藤綱は鎌倉時代中期の武将。北条時頼に使え、引付衆になり時頼に諸国視察をすすめた。

有名な逸話は、鎌倉の滑川に落した十文銭を松明代五十文かけて探させ、拾い上げた十文銭と松明を買った五十文、どちらも世の中の為になり無駄にはならなかったと説いたという故事である。その名奉行ぶりは、江戸時代の大岡越前にも並び称された。

歌舞伎や浄瑠璃において庶民の理想とする為政者として描かれた。

【鍛冶町】

安倍清明と九尾狐

「絵本三国妖婦伝」では、藻女と呼ばれ、子の恵まれない夫婦によって大切に育てられ、美しく成長。十八歳で宮中で仕える女官となり、玉藻前と呼ばれる。その美貌と博識から鳥羽上皇に寵愛されるようになる。

しかしその後、上皇は次第に病に伏せるようになり、朝廷の医師にも原因が分からなかった。そこで陰陽師・安倍清明が玉藻前の仕業と見抜くのであった。

安倍清明が真言を唱えると玉藻前は正体を現した。それは白面金毛九尾の狐であった。

【十六日町】

悪七兵衛景清の鍛引

藤原景清は平安時代末期から鎌倉時代初期の武士。平家に仕えていたことから平景清とも呼ばれる。藤原秀郷の子孫。上総介藤原忠清の七男であるため「悪七兵衛」の異名を持つほどの勇猛な武士であった。平安末期の治承、寿永の乱（源平合戦）で活躍。

「平安物語」巻十一「弓流」において、美尾屋十郎の鍛を素手で引きちぎったという「鍛引き」が特に有名で、十郎はなんとか逃げ延びる。景清は「遠くからむ者は音にも

聞け、近くに寄って目にも見よ。これこそ京童の呼ぶなる上総の悪七兵衛景清よ…」

十郎の鍛を長刀の先に高く揚げ名乗る場面である。

【六日町】

俵藤太秀郷（たわらとうたひでさと）　百足退治（むかでたいじ）

藤原秀郷は平安時代中期の貴族・武将。俵＝田原、藤太は藤原氏の長、太は太郎の意味。相模国淘綾郡田原荘（秦野市）を名字としたといわれる。

近江国瀬田唐橋に大蛇が横たわり、人々は恐れて渡れない。そこを通りかかった俵藤太は臆することなく大蛇を踏みつけ渡ってしまった。その夜、美しい娘が藤太を訪ねた。娘は琵琶湖に住む龍神一族の者で昼間の大蛇は娘が姿を変えたものだった。娘は龍神一族が苦しめられている三上山の大百足退治を懇願した。藤太は山を七巻半する大百足を退治することとなった。矢を射たが通じない。最後の一本の矢に唾をつけ、八幡神に祈念し射った。大百足をついに退治し、龍神の娘から米の尽きることのない俵などの宝物を贈られ、凱旋するのであった。また、龍神の助けによって平将門の弱点を見破り、討ち取ることができたという伝説も残っている。

明治四十四年（一九一一）

【廿六日町】

五郎正宗（ごろうまさむね）の生立（おいたち）（三條小鍛冶宗近（さんじょうこかじむねちか）　神護鍛冶（しんごかじ））

五郎入道正宗は、鎌倉時代末期から南北朝時代初期に相模国鎌倉で活躍した刀工。日本刀剣史上もっとも著名な刀工の一人。「名刀正宗」と刻印されるほどである。

能「小鍛冶」一条の院より剣の鋳造を命ぜられた三條小鍛冶宗近が、進退窮って稲荷明神に救いを求め、その神力によって無事名刀小狐丸を打ち上げる。

童子の姿で現われ、漢家本朝の剣にまつわる伝説を語る。そして童子は稲荷明神（神狐）の姿となり自ら手を貸し、宗近と一緒に剣を打ち、名刀小狐丸を完成させる話。

【十一日町】

佐藤忠信（さとうただのぶ）　勇戦の圖（ゆうせんのず）

平安時代末期の武将で源義経四天王の一人。兄は継信。父は奥州藤原氏に仕えた佐藤忠継。源平合戦で活躍した武将。

義経記では、雪の吉野山にて義経の囮となって一人都に戻り奮戦し、壮絶な自害をする。歌舞伎などの演目として名高い「義経千本桜」の狐忠信、源九郎狐のモデルでもある。碁盤を持って立ち回る碁盤忠信も有名である。

【朔日町】

山中鹿之助（やまなかしかのすけ）　早川鮎之助と對面の圖（はやかわあゆのすけとたいめんのず）

戦国時代から安土桃山時代にかけて活躍した山陰地方の武将。戦国大名尼子氏滅亡後に尼子氏復興を勤めたとされる十人の勇士（尼子十勇士、または名前の最後に皆「介（助）」が付くことから「尼子十勇十介」ともいう）の筆頭。山中幸盛（通称　鹿之助）。優れた武勇の持ち主で「山陰の麒麟児」の異名を取る。

山中鹿之助が毛利元就に滅ぼされた尼子再興をはかり山中を行軍しているとき、背に戸板を負い病床の老父のために早瀬を堰き止めて鮎を取る怪力無双の少年を見つけた。類稀なる怪力と親孝行心に感動し鹿之助は「早川鮎之助」と名づけ城に連れ帰ったという。その後鮎之助は鹿之助の期待に応え、敵に捕らわれた城主を救うため堀に潜水し、見事奪還する偉業を成したという。

【鍛冶町】

荒獅子男之助（あらじしおとこのすけ）　床下の場（ゆかしたのば）（松前鉄之助（まつまえてつのすけ）　怪鼠を懲す（かいそをじょうす））

伽羅先代萩（めいぼくせんだいはぎ）仙台藩伊達騒動を題材とした人形浄瑠璃、歌舞伎の演目。通称「先代萩」の登場人物。

お家乗っ取りをたくらむ家老、原田甲斐（仁木弾正）は鼠の妖術を使う。

歌舞伎、先代萩床下の場は御殿の床下で警護を行っていた忠臣　荒獅子男之助（松前鉄之助）が巻物をくわえた大鼠を踏まえて鉄扇で打ちつける場面。

【十六日町】

秋野の月（武蔵野の月）（あきのつき　むさしのつき）

武蔵野は月の名所で古典和歌では平安末期ぐらいから詠まれだした。

○宿りこし　露の行方をとひかねて　霜になれぬる
武蔵野の月（後鳥羽院）

○めぐりあはむ　空ゆく月の行末も　まだ遥かなる
武蔵野の月（藤原定家）

また、月の名所は古来からさまざまな文芸をはじめ、美術、工芸作品の題材として与えてきた。（古典的な山車の一つ。大きな満月にススキなどを配した古風な型。）

【六日町】

源三位頼政（げんざんみよりまさ）　鵺退治（ぬえたいじ）

源頼政（みなもとのよりまさ）。平安時代末期の武将、公卿、歌人。清和源氏としては突出した公卿の従三位に叙せられていたことから源三位（げんざんみ）と称された。保元の乱、平治の乱で活躍した。

平安時代の末、幼くして即位した近衛天皇の頃、天皇は毎夜丑の刻になると苦しみだすのだった。怪しいもののけの仕業らしい。そこで頼政が召された。

頼政は神に祈り、山鳥の尾で矢引いだ矢二本を携え、家来の猪早太（いのはやた）とともに夜を待って東三条の森からくる黒雲に向い矢を射った。矢は見事にもののけを射落とした。正体は頭は猿、尾は蛇、手足は虎である鵺という妖怪であった。天皇は頼政を褒めて獅子王という名剣を与えた。

その後二条天皇の応保の頃、鵺という怪鳥が泣き叫んで天皇を悩ませた時も再び頼政が召され鵺を退治したという。

大正三年（一九一四）

【十一日町】

紅葉狩りの圖（もみじがりのず）

能・歌舞伎の演目。高貴な風情をした女が侍女を連れ、山の紅葉を愛で、酒宴を催していた。その酒席に狩の途中の平維茂の一行が通りかかり、招かれる。高貴な女はこの世の者とは思えぬ美しさで舞いを舞う。酒を勧められ維茂は眠ってしまう。

維茂の夢の中に八幡大菩薩の眷属の山の神が現われ、眠りをさます。なんと先程の美しい女達は戸隠山の鬼女であった。

維茂は、勇敢に立ち向かい激しい戦の末にみごと神剣にて鬼女を退治したという。

大正六年（一九一七）

【十一日町】

那智霊験勝五郎（なちれいげんかつごろう）

賢女烈婦伝の内の初花を人形浄瑠璃、歌舞伎とした「箱根霊験躄仇討」。飯沼勝五郎は、兄の三平を殺した佐藤剛助を追って、妻、初花と流浪するも病のため足が不自由になってしまう。箱根阿弥陀寺までくると剛助は勝五郎の母を捕えてこれを枷（かせ）に初花を連れ去る。初花は剛助を討とうとして返り討ちにあうが、その初花の亡霊は夫のもとへ帰り、滝に打たれての祈願により勝五郎は足が治り、兄と妻の敵（かたき）を討つ。

【朔日町】

風流（ふりゅう）　山吹の里（やまぶきのさと）

若き日の太田道灌がにわか雨にあい、あばら家で蓑を借りようとしたところ、出てきた少女は無言のまま山吹の一枝を差し出した。道灌は怒ってその場を立ち去ったが、あとで家臣から少女の行為は「七重八重花は咲けども山吹の実一つだになきぞ悲しき」という古歌に寄せて、蓑のひとつさえ持てないかなしさを山吹の枝に託したものだと聞かされ、自分の無学を恥じ、それ以降歌道に精進した。太田道灌は室町時代後期の武将、江戸城を築城したことで有名であり、武将としても学者として一流であったと伝えられる。

大正八年（一九一九）

【六日町】

関の扉（せきのと）

本題は積恋雪関扉（つもるこいゆきのせきのと）通称「関の扉」常磐津節及びそれに合わせて演じられる歌舞伎舞踊。

雪の降り積もる逢坂の関では、不思議にも小町桜が咲いている。良岑宗貞（のちの僧正遍照）が隠棲している。元の恋人の小町姫が通りかかりと、その仲を関守の関兵衛が取持つが小町姫は怪しく思い、都へ走る。

実は関兵衛こそ天下を狙う大伴黒主だった。野望祈願に使う護摩木にするため、小町桜を切ろうとする。そこに薄墨という遊女が現われ関兵衛をくどく。薄墨は墨主に殺された宗貞の弟安貞の恋人で本性は、小町桜の精であった。小町桜の精（薄墨）と大伴墨主（関兵衛）との争いとなる。

大正十一年（一九二二）

【下大工町】

唐犬（とうけん）　權兵衛（ごんべい）

江戸時代の侠客。町奴の頭目。

旗本の土大道寺権内の屋敷前を通る折、手飼の唐犬二匹をけしかけられた。権兵衛は土足で犬を踏み殺した。それから「唐犬」の異名を取るようになった。男伊達で有名で、額を広くして髪を結う唐犬額という粋の代表に数えられた男。

昭和二年（一九二七）

【廿八日町】

檜山騒動（相馬大作）

文政四年四月二十三日の相馬大作事件。南部藩士、下斗米秀之進を首謀者とする数人が、参勤交代を終えて江戸から帰る津軽藩主、津軽寧親を襲ったが失敗となった。下斗米秀之進は別名を相馬大作と名乗っていた。この事件を檜山騒動という。

山車はその襲撃の場。相馬大作は陸奥国二戸郡福岡の盛岡藩士、下斗米総兵衛の二男。

昭和七年（一九三二）

【鍛冶町】

佐賀の夜櫻　鍋島猫騒動

肥前国佐賀藩の二代藩主　鍋島光茂の化け猫騒動。

光茂の碁の相手を務めていた家臣　龍造寺又七郎が、光茂の機嫌を損ねたため殺されてしまう。又七郎の母は恨みながら自害。この母の死体の血を舐めた飼い猫が化け猫となり側室お豊の方を食い殺し、乗りうつって光茂に近づく。さまざまな怪異がおこるが、光茂の家臣が化け猫を退治して佐賀藩を救う怪談話。

昭和十年（一九三五）

【旭町】

国定忠治　赤城山の場

国定忠治は江戸時代の侠客。上野国（上州）佐位国定村の生まれで、本名は長岡忠次郎。

博徒となって上州から信州一帯で活動し、「盗区」として一帯を実質支配する。講談や映画、新国劇などの演劇の題材になり、特に赤城山が有名でその台詞が

「赤城の山も今夜かぎり・・・」

昭和十一年（一九三六）

【十六日町】

荒神山　血煙　吉良仁吉奮戦の場

吉良仁吉は清水次郎長の兄弟分として幕末期に活躍した

侠客。特に有名な荒神山の喧嘩は慶応二年（一八六六）四月八日に伊勢国荒神山で起きた博徒同士の私闘。
講談の神田伯山、浪曲の広沢虎造の次郎長伝で全国的に有名となった。吉良の仁吉奮戦の場。

【朔日町】

月形半平太（つきがたはんぺいた）

行友季風・作の戯曲、映画、テレビの主人公の名前。国定忠治と並ぶ、新国劇を代表する作品。
幕末の京都を背景とした長州藩士、月形半平太を取り巻く恋と剣の物語。劇中の「春雨じゃ、濡れていこう」の台詞が有名となった。モデルは武市瑞山　通称・半平太だとされる。恋人の舞妓、梅松と傘をさし、春雨の中を行く月形半平太の粋な場面。

昭和四十五年（一九七〇）

【新荒町】

天馬（てんま）

天馬は、ギリシャ神話にでている翼を持つペガサスはもっとも有名。山車は雲の上を飛ぶ天馬を背景に太陽が輝き、天女たちが曲を奏でて舞う。ギリシャ神話の天馬ペガサスは秋空に輝く星座。天馬はペルセウスに退治されたので首から流れたメデューサの首から流れた血から生まれた。天を支配するオリンポスの大神ゼウスにつかえて、雷や雷光を運ぶ役目を持った馬。
一時期ベレロフォンの乗馬になって大活躍するが、功に慢心したベレロフォンを空で振り落としてゼウスのもとに帰る。天に駆け上るために蹄で討ったところが泉となったため、詩の天女たちの馬ともなった。
かぐや姫が空に帰るとき天女と馬車に迎えられる。白鳥や鶴など大きい白い翼を持つ鳥が、説話では天女となっている。宇宙時代に宇宙をかける天馬、美しき天女たち、欧州に数多い天馬神話。馬産地南部の雄大な祭りにふさわしい出し物である。

【新組町】

風神雷神（ふうじんらいじん）

風神雷神といえば、一六三〇年代の俵屋宗達の屏風の絵があげられる。この代表作の絵は京都建仁寺にある屏風二曲一双で各面154cm × 169cm。怒っていて笑っているような雷神の顔、風袋をかついで走ろうとする風神の姿が、ユーモラスである。
輪の中の小さな小太鼓らしいものを打つ槌をもち雲にの

る雷神。雲に乗り風になびかせる風神。
　驚きや恐れを神々とした古き時代には、いろいろの神がある。これもその一つであろう。古代には雷は畏敬の神で、稲妻と雷鳴は神の怒りであった。ローマのジュピターは天空の雷神。日本のタケミカヅチ、ワケイカヅチの神も雷の性質をもっている。宗達後の光琳も風神雷神を描いている。

【売市】

証城寺の狸囃し（しょうじょうじのたぬきばやし）

　証城寺の狸囃子は、歌で有名。千葉県木更津市の証城寺は昔、狸の住処だった。毎年八月十三日には狸供養が行われる。民話によれば、木更津の証城寺に昔は、和尚様が住み、三味線の好きな人だった。ある秋の夜、庭でザワザワという騒ぎに眼を覚ました。庭に出てみると人影もない、眠るとまたザワザワという音。そっとのぞいてみると大狸、子狸百匹が行列を作り、腹をたたき、木の葉の笛を吹いて踊り狂っていた。そして声を合せて歌った。証城院のぺんぺこぺん、おいらの友だちゃどんどこどんとくり返し本堂を回った。和尚も加わってぺんぺこぺん。四日も続けて踊った五日目に狸は来なかったので、不思議がって本堂のあたりを見回すと、なつかしい大狸が太鼓腹を破って横たわっていた。狸は人を化かすというが、文福茶釜、かちかち山など愛敬がある。佐渡の団三郎狸、阿波の大名行列、たぬき合戦の狸など人気がある。山車は証城寺の夜の庭で踊る狸。

【糠塚】

鶏舞（けいばい）

　鶏舞は、郷土色豊かな南部地方の鶏舞を主題としたもの。鶏舞は北奥羽地方に広がる念仏舞の一つで、うら盆の供養祭りでもある。三戸郡階上町平内の鶏舞は青森県の文化財に指定されているし、東北地方芸能暦の中にも旧七月十三日のうら盆に同平内で鶏舞が行われているとなっている。鶏舞はつゆぎ（柳の枝を八方に垂らした六角の灯篭につけたもの）をおき、踊り手はそれを中心に輪になり太鼓、笛、鐘の囃子とゆるやかな調子の歌に合わせてまわり、首まで垂れる錣（シコロ）を馬の毛でつくった兜が太夫、踊り手は鶏兜を、その兜には雌雄があって三番、四番のトリが踊る。刀を左右に振り回して、踊るので剣舞ともいう。
　朝日長者の一人娘、三国一の子どもよい、三国一の宝には吾が児にましたる宝なし…と唄い、時々大きな掛け声が入る。うら盆の行事。

【朔日町】

南祖坊と八の太郎（なんそのぼうとはちのたろう）

南祖坊と八の太郎は、ご存知十和田湖伝説。六尺にあまる大男八の太郎を鬼もおそれていた。ある日、仲間の三治と喜藤と山にゆき、八の太郎は仲間にかくれ奥入瀬川から三匹の岩魚をとって焼いて食った。その後、のどが渇き谷川で水を飲むと八頭の竜になってしまう。年月が流れ、竜の八の太郎は沢をせきとめ、十和田湖をつくり主になった。

ある日水底に眠る八の太郎に呪文が聞こえ体が痛んだ。八の太郎はかっとなって湖面にのぼった。岸には一人の坊主が念仏を唱えていた。「八の太郎、わしは南祖坊だ、熊野権現のお告げで、この足の鉄のわらじの切れところを永住の地とせよに従い、わしが主となる、早く去れ」という南祖坊に怒った八の太郎は黒雲を呼び口から小竜を吐き南祖坊を攻めた。南祖坊は八巻のお経を投げつけ九竜となって両者は七日七夜の死斗をくりかえす。南祖坊の呪文は針の剣となり八の太郎を攻める。ついに八の太郎は敗れて八郎潟に逃れる。山車はその決斗の場。

【下大工町】

沖縄の踊り子（おきなわのおどりこ）

沖縄の舞踊は、沖縄の民俗芸能の一つである舞踊の中で、かつての王侯貴族たちが宮廷舞踊として正月に踊っていた鷲鳥（はしんのうい）を山車はきらびやかに舞わせる。

背景は、沖縄を代表する守礼の門で、三人の美女があでやかな衣裳を着て、蛇皮線をひき踊る。その舞台を観る客二人。海岸に娘が立って、まだ来ぬ恋人を待っている。

沖縄は、一六〇九年薩摩藩の属領となったが、明治十二年までは、首里を首都とする独立王国を形づくっていた。

沖縄舞踊は、玉城朝薫が享保三年（一七一八年）王から作劇を命じられて、沖縄の諸芸能をもとに、日本本土の能、狂言、歌舞伎など参考として五番の組踊を創作している。

昭和四十六年（一九七一）

【新荒町】

日蓮上人佐渡配流（にちれんしょうにんさどはいりゅう）

千葉県安房郡東条郷の漁師の子として生まれた日蓮は、十二歳のとき清澄山にのぼって、十六歳のとき出家した。鎌倉に出て諸宗の教理を学び、比叡山（ひえいざん）にのぼり、諸国を遊学して、法華経こそが最高の真理と確信し、一二五三年清澄山に帰り「南無妙法連華経」の題目をとなえて立教開祖したという。鎌倉で辻説法して信者を集め、同六年に立正安国論を書いて幕府に奉ったため、念仏の徒の怒りをかっ

て訴えられ、同六十一年伊豆に流され二年後に許された。
その後も諸宗を攻撃したため同七十年再び訴えられ滝ノ国の法難にあい佐渡に流された。七十四年日蓮は許され、身延山に法華道場として正法を宣布しようとここに隠棲（いんせい）。八十二年六十一歳で死去した。
日蓮は、鎌倉時代の日蓮宗（法華宗）の開祖で、開目抄、歓心本尊鈔などのほか多数の著書がある。
山車は、その日蓮が佐渡に流されたときに、嵐あって波をしずめるため、波に描く七文字の場。

【新組町】

八之太郎（はちのたろう）と辰子姫（たつこひめ）

十和田湖伝説の主人公である八之太郎は、南祖坊に追われて八郎潟の主となる。その八の太郎が田沢湖の主である辰子姫と恋をする。山車は、その二竜のものがたり。
辰子姫は、世にも稀に美しい働き者の娘であった。辰子姫はある日水鏡で自分の姿を見て「いつまでも年をとらず、美しさを保ちたい」と考え、院内獄の大蔵観音に百日参りをした。観音様は「北の山の清らかな泉の水を飲め」と告げた。三人の娘と山菜とりにいった日、辰子姫は森の奥で泉をみつけ、冷水を飲んで気を失った。三人の娘は辰子を探して呼んだ。森の奥からかすかな返事がするので、行ってみると、そこには竜となった辰子がいた。こうして辰子姫は田沢湖の主になった。
南祖坊が田沢湖の辰子姫に恋をしたが、ふられてしまったともいう。辰子姫は八之太郎と深いちぎりを結び、冬に八之郎は田沢湖で暮らすために八郎潟は氷が張り湖は浅くなり、田沢湖は深くなるという。竜は水神。秋田、青森の民話。田沢湖畔の神社に竜湖姫神がある。辰子姫は田鶴ともいわれる。

【糠塚】

海に投げこまれた弁財天（うみになげこまれたべんざいてん）を拾いあげる量光和尚（ひろいあげるりょうこうおしょう）

はちのへの観光の代表地蕪島は、天然記念物「うみねこの棲息地」。この蕪島神社に弁財天が祀られている。（旧暦三月三日）この祭礼で、五万人の善男、善女が訪れる。弁財天は七福神の一人で、音楽、雄弁、学芸の神として尊ばれる女性の神である。
八戸藩三代藩主の通信の母である笘月局お沢の方の寄進とも伝えられ、明治二年の神仏分離のとき弁財天は仏であるとして海に捨てられたとき、鮫町浮木寺の量光和尚が拾い、同寺に安置した。旧三月三日に開帳される。弁財天は「びわ」を抱いているが、蕪島の弁財天は八臂像（はっぴぞう）で、頭に鳥居、手に弓、矢、刀、斧、杵、矛、羅索、玉を持っている。一

説の蕪島伝説に、工藤祐経の子犬房丸が流罪で蕪島に流れ着き、江ノ島にみたてて弁天堂を建立。子孫が京が島の渚に浮いていた尊像御鏡をみつけ勧誘したのが蕪島大明神本地弁財天ともいわれる。山車はその郷土色豊かな場面。

【鍛治町】

源為朝と白縫姫の出会いの場

源為義の八男として生まれた源為朝は、幼少のころから剛勇で弓が巧みだった。十三歳のとき為朝は九州に追われ、源氏の一族築紫豊後の国屋張家遠のところにあずけられ、紀平次などと暴れ回る十六歳のころ、平家の系統阿蘇三郎忠国の息女白縫姫を恋するようになった。白縫姫は伊豆に為朝を追い女護島で死んだという。為朝を豊後を本拠地に九州一帯を荒らし、遠く琉球（沖縄）まで荒らし回り、自ら鎮西八郎と名乗った。朝廷は為朝一党を鎮圧するため父為義を捕えたため上京して保元の乱で兄義朝と敵味方に分かれて戦う。戦いに敗れて捕らえられ伊豆大島に流された。ここで女護ヶ島（八丈島）の探検もする。勢力をもちかえす為朝を討ったため信西の命を受けた工藤茂光が嘉応二年四月二十八日兵船十数隻が攻めてきた。絶壁に強弓はうなった。罪を一身にかぶって自殺したという為朝。琉球に逃れたともいう。山車は五重塔の猿を傷つけずに射落とす白縫姫との出会いの場。

【内丸】

波切不動明王

不動明王は仏教文化圏で広く庶民から信仰されている。嵐をしずめる能力のあるところからシバ神とも関連していると伝えられる。仏教の守護神の一つで、大日如来の降魔（悪魔を払う）の化身とされており、愛染明王の慈悲に対する。観音信仰とともに不動信仰は熱烈である。尊像、曼荼羅、供養法がある。

不動一尊で関東の大寺院である千葉県成田市の成田山新勝寺は有名。不動の像は、多面、多手の火炎を背負った忿怒の形の像から一面二手の童子像の種類がある。右手に持つ剣は悪魔や煩悩をくじく象徴で、左手のなわは自由自在を表わす。京都栗田口の青蓮院の青、高野山明王院の赤、三井寺の黄不動を総称して三不動という。

成田不動は、平将門の乱のとき僧寛朝が高雄山神護寺不動堂の本尊不動明王を安置したという。この不動は弘法大師作という。大師が唐国にわたるとき大嵐にあい、この嵐をしずめるため不動と二童子が現われ、波を切って救ったという。山車はその波切不動明王。

昭和四十七年（一九七二）

【新荒町】

一葉観音と曹洞宗開祖道元禅師

仏教の曹洞宗開祖の道元禅師は、内大臣久我通親を父とし、太政大臣藤原基房の娘を母として京都に生まれた。幼い頃父母を失い、十三歳で出家した。宗教上の悩みを解決するため、三井園城寺の公胤僧正の指示で、建仁寺栄西禅師に師事して、高弟明全和尚に従って、二十四歳に宗（中国）に渡った。

道元禅師が、宗国で修行を積んで、安貞二年（一二二七年）に帰朝のとき、大嵐に会い、帆は折れて、船は沈没しそうになって、人々は生きた心地もなく泣き叫んでいたとき、道元禅師は静かに舷頭に座って一心に、念波観音力波浪不能没、と念じたところ、一葉の白蓮に座した観音菩薩があらわれて、波をおさめてくれ、間もなく船は肥前の河尻の港に無事着いた。一葉観音の場面。

道元禅師は宋国より帰って、後進の指導にあたり、宇治の興聖寺や越前の永平寺を建てた。宗教哲学の正法眼蔵九五巻の著書も有名である。

【売市】

天草四郎の亡霊の場

長崎県島原半島と天草島に起こった農民一揆の島原の乱。江戸時代の初期一六三六年～七年の戦いである。

このときの島原の乱の首領が天草四郎。本名は益田四郎時貞といい、小西行長の臣益田甚兵衛好次の子と伝えられている。幼い頃から美しく才知に優れ神童といわれ、幻術をつかえたという。一六三六年にキリシタンの弾圧と重税に反抗した農民たち三万五千が乱を起こしたとき、神の再来として一揆の首領にさせられた。とき十六歳の若さだったという。

有馬氏のあとをついだ首領松倉重政は、原ノ城、日野江城を廃城にした。松倉氏の教徒厳罰と重税に反抗して、農民はその原ノ城址を修築してたてこもった。松倉氏は税滞納者は水牢に入れたり、ミノを着せて火責め、指切り、子責め、針差し責めなどのをしたので、迫害に耐え切れなくなった農民は武士や代官を殺した。一方病気を全快させたりして信徒を増す小西行長の遺臣と一緒の天草四郎のキリシタン一行と農民は合流した。幕府軍の総指揮に板倉重昌があたり、再三攻撃して破れたが、寛永十五年二月原ノ城は落ちて、天草四郎は戦死したと伝わる。山車は敵船を亡霊になってなやます天草四郎。

【糠塚】

角兵衛獅子（越後獅子）

角兵衛獅子は越後獅子とも呼ばれ、新潟県蒲原郡月潟村からでた大道芸人の獅子舞。角兵衛の名については親方の名前だともいう。江戸時代には月潟村に三十余人の親方がいて、それぞれ七、八人の少年をかかえて、年中諸国を回った。親方の打つ太鼓に合せて、小さな獅子頭をつけた十歳前後の少年が胸にかっ鼓をつけて、たっつけ袴姿にあしだをはいて、逆立ちをしたり、とんぼがえりをしたりの曲芸をやった。

このほかに、三人組の三匹獅子の曲芸が加わり、よく江戸に進出した。知らぬ他国の空で、とんぼ返りで、その日も暮れた少年たちの物語は映画や歌に登場して涙を誘うときもあった。

当時の角兵衛獅子は、歌、三味線曲、箏などで旅と郷里の物語をつづった地唄になったり、長唄、舞踊となったりした。

山車は、その角兵衛獅子曲芸の場で、見返しは獅子頭をつくる名工角兵衛親方。獅子には牡丹がつきものというから、山車も百花の王牡丹の花があしらわている。テレビでも時代物ドラマには、ちょいちょい角兵衛獅子が登場する。この獅子舞は江戸時代初期に始まったという。

【十六日町】

弟橘媛

日本武尊は、父、景行天皇の命令によって、東方の諸国の悪い神や、従わない者たちを平定する。出発にあたって伊勢神宮に参拝し、叔母の倭媛から草薙の剣を受けて旅立った。東国の山や川の乱暴な神々や従わない者たちを平定して、相模国に入って、国の造にだまされ、沼のほとりで火をつけられて、草薙の剣で草をはらい、火打石で火をつけて焼きかえして、国の造どもを滅した。今ではこれを焼津といっている。

そこから走水を舟で渡るときに、海神が波をたたせ、嵐になって船は進めなくなった。そのとき妃の弟橘媛が「私があなたに代わって海に入りましょう。あなたは任務を果たして下さい」と、スゲ、皮、絹の各畳八枚を波の上に敷いて、その上に降り、海神の怒りを修め日本武尊一行を救った。尊は七日後海辺で櫛を拾い墓をつくった。その後悪い蝦夷を平げられた。山車は入水する弟橘媛。

【内丸】

牡丹と唐獅子

山車場面は絵画である。狩野永徳、狩野派俵屋宗達の筆になるものが、日光東照宮や京都にも残っている。

俵屋宗達は、元禄時代の画家で、能登（石川県）の人。姓は野々村、屋号は俵屋という。鳥丸光広、本阿弥光悦と交わり、絵を書いた。近代性をもつ装飾形式は、後に尾形光琳に大きな影響を与えた。京都醍醐寺に多く作品が残っていることから、晩年京都に在住していたのではないかと推察されている。代表的作品としては、源氏物語関澪標屏風。風神雷神屏風。舞楽および扇面貼交屏風。杉戸絵に獅子・麒麟、白象図。巻物では西行法師行状絵詞他がある。

牡丹の花は、中国原産で百花の王といわれる。日本には一千年前に移入され、平安時代寺院に多く植えられた。立てばしゃくやくすわれば牡丹、美人の姿にたとえらえている。山車は前田青邨の紙本金地六双屏風一双と福岡県田主丸附近産の木綿友禅蒲団から取材している。勇壮な獅子と華麗な牡丹そして石橋（しゃっきょう）の人形を配した。

【類家】

会津飯盛山白虎隊二十士（あいずいいもりやまびゃっこたいにじゅうし）

福島県会津といえば白虎隊と、誰しも思うように、紅顔可憐な少年白虎隊が会津魂を天下にひびかせた功績は大きい。白虎隊が活躍する会津戦争は、鳥羽、伏見の戦いに敗れた会津藩主松平容保（かたやす）が、謝罪嘆願を奥羽鎮撫総督の九条道孝に出したが、長州の参謀世良修蔵がにぎりつぶしたので、仙台藩士が世良を斬殺。かくて奥羽列藩同盟が結ばれ、慶応四年（一八六八年）戊辰四月二十三日薩長が大挙して進撃。奥羽に風雲がたなびいた。奥羽討伐は怒涛の如く白河越、棚倉、三春、二本松の各域を攻め落とし、鶴ヶ城に迫った。八月二十一日亀ガ城を陥し入れ、若松東方十粁に迫った。警鐘が城に乱打されて人は城に集まった。ここで白虎隊は出動する。士分、寄合、足軽白虎隊各隊八十名は、年齢十六・七歳。八月二十二日敗報の中白鉢巻の少年は、秋雨の中、堂々と母や姉に見送られながら修羅の戦場に出発していった。激戦につぐ激戦に敗れて白虎隊は、飯盛山にのがれた。たどり着いた少年は二十名、東鶴ヶ城をみれば火災。城と運命をともにしようと少年たちは割腹した。のちに一名は生存。十九士の墓がある。山車はその白虎隊の勇姿。

【朔日町】

常盤御前（ときわごぜん）

源平争乱時代の武将の源為義の長男である源義朝の妾、常盤御前は、夫義朝の間には、今若、乙若、牛若の三子があった。山車は、平治の乱で夫義朝が破れたため、牛若を抱き、乙若、今若を連れて都落ちをして東北をさしてくだる。その雪降る都落ちの常盤御前の場面。

その後、常盤は六波羅に自首し、平清盛の愛をうけて一女を生み、さらに藤原長成に嫁いだ。今若は後の阿野全成、

乙若は円成、牛若は義経になる。
ご存知義経の兄は、義朝の三男頼朝であり、源氏再興のため二人で平家を滅した。
義朝は、一一五六年の保元の乱に、平清盛とともに天皇方に召されて上皇方の父為義と戦ってこれを破ったが、乱後に、信西と結んだ清盛が急速な昇進をしたため、不平が爆発して藤原信頼と結んで平治の乱を起こしたが失敗して東国に逃れようとした。尾張で長田庄司忠致に殺され、義朝の長子悪源太義平も捕らえて斬られる。頼朝も捕らえられて伊豆に流されたのが十三歳のときであり、また牛若丸も鞍馬寺に預けられている。

【十一日町】

源頼光と怪賊鬼童丸（みなもとのよりみつとかいぞくきどうまる）

いまから九百余年前、源氏の名将源頼光は、家来の渡辺綱、占部季武、碓井貞光、坂田公時の四天王を従えて狩に出かけたとき、京都の北の市原野の牧場にさしかかると人馬のひびきに驚いた牛の群が逃げていった。その牛の郡の中に一頭だけ、じっとうずくまって動かない牛があった。「怪しい奴」と、ふしぎに思った頼光が、弓を射かけると、牛はさっと立ち上って、牛の腹の中から長剣片手の怪賊が躍り出て来て「頼光かくご」と、家来の中を飛鳥のようにくぐり抜けて頼光めがけて斬りかかった。頼光は名刀鬼切丸を抜く手も見せず怪賊の首を切って落とした。この怪賊の名は鬼童丸。都を荒らし回る強盗の首領であった。日頃から頼光に恨みをいだき、その恨みを晴らそうと、その日市原野に待ち伏せていたのだった。
源頼光は平安中期の武将で、源満仲の子で、弓にすぐれ摂津、伊予、美濃の国司を歴任した。大江山の鬼退治は有名である。
山車は、頼光と鬼童丸の市原野での対決の場。

【下大工町】

牛若鞍馬山奥（うしわかくらまやまおく）　僧正が谷の修行の場（そうじょうがたにのしゅぎょうのば）

鞍馬の子天狗と呼ばれる牛若丸は、源義経が鞍馬山で鳥天狗から剣を習った頃のこと。義経は源平争乱時代の武将で、その生涯は波乱に富んでいる。母は常盤御前。幼名を牛若丸といい七歳のとき鞍馬寺に上った。十六歳のとき源九郎義経と名乗り、奥州の藤原秀衡のもとにおもむき、一一八〇年頼朝の挙兵で黄瀬川で対面。上京して義仲を破り、一の谷、屋島の戦い、壇ノ浦の戦いで平家を滅ぼした。その後、勝手なふるまいがあったとして頼朝に追手をかけられ、秀衡にかくまわれるが秀衡死後、子泰衡に攻められ衣川の館で自殺した。ときに義経三十一歳であった。
山車は、平清盛に捕らえられた牛若丸が鞍馬寺に預けられたとき、源氏再興のため毎夜京都、鞍馬山の奥に住む僧

正ヶ坊という大天狗、からす天狗などと武芸をはげみ、武術にすぐれた武将になろうとするその場面。

【日商月金会】

岩見重太郎の狒々退治の場

豪傑岩見重太郎が、武者修行のため諸国を遍歴中に、たまたまある村を通りかかると村人が騒ぎ悲しんでいた。聞くと毎年秋、娘のある家に白羽の矢が射こまれ、神社に人身御供に差し出さなければ、村に災いがあるという。今年は庄家の一人娘ということである。これを聞いた岩見重太郎は、神様がそんなことするはずがない、何か妖怪の所業にちがいないと、災いをおそれる村人と相談して、自ら白装束に身をやつし、刀をかくしもって箱に身を入れた。夜の神社に人身御供の箱を置くと村人は恐ろしさのあまり、走り帰ってしまった。

真夜中すぎ、森を荒々しく鳴らして巨大な怪物が箱に寄ってふたをあけた。躍り出た岩見重太郎は、怪物めがけて斬りかかった。斬っても斬っても怪物はなかなか倒れなかったが、ついに豪傑岩見重太郎の前に、奇妙な声をあげて怪物は斬り殺された。翌朝村人は夜明けに、神社にゆくと数百年も経たと思われる狒々が重太郎の前に血にまみれて倒れていた。それから村は娘の人身御供もなく平和になったという。

壮年期の人々になつかしい講談武勇伝の一冊。重太郎は安土桃山時代の武将で、大阪夏の陣で戦死した。薄田隼人ともいわれる。

昭和四十八年（一九七三）

【新荒町】

千早城の戦い

南北朝時代の武将だった楠正成は、河内の豪族であった。千早城は大阪府南東部の南河内郡の千早赤坂村の金剛山の一隅にある。正成の尊称は大楠公、子正行は小楠公。後醍醐天皇の夢に二童子が現われて「木に南の席がお隠しできる場所」といったことが、楠多聞兵衛正成との出合いともいう。元弘元年（一三三一）後醍醐天皇の討幕の計画に加わった楠正成は赤坂城に挙兵したが、七万五千から十数万の幕府軍に楠勢三千は善戦したが落城した。その後五百騎の兵で、この赤坂城をとりかえした正成は、七杆奥に千早城を築いて本拠とした。元弘三年二月、幕府の大軍に赤坂城は落城したので、一千余人の楠勢は千早城で、この大軍の攻撃を受けたが、大石を落して一日に五千人の死傷者の損害を与え、藁人形作戦などで、幕府軍と長期戦になった。足利尊氏が幕府に反旗をひるがえして、新田義貞の攻撃で

鎌倉幕府は滅んだ。尊氏の離反で、これを九州に迫ったが、延元元年尊氏の十万の大軍の東上を湊川に迎え討って、弟正季とともに正成は敗死した。根城南部氏もこの頃北畠一族と南朝に味方して戦った。山車は、楠公が奮戦するその千早城の戦いの場。

【本鍛冶町】

奮闘する清水一学（ふんとうするしみずいちがく）

元禄忠臣蔵は、あまりにも日本人好みの物語である。映画にテレビに歌舞伎に、当り番組の忠臣蔵は、祭りにもたびたび登場している。

元禄十四年三月京都から勅使が江戸に下向することになった。このとき播州赤穂の城主浅野内匠頭長矩が、この接待役となった。田舎大名の長矩は、高家筆頭吉良上野介から教えを受けようとしたが、辱かしめられた。このため殿中松の廊下で上野介に切りつけた。浅野は即日切腹させられて、所頭は没収されたので大石内蔵助良雄は浅野家再興を計るが、受け入れられず苦節一年十ヶ月、翌十五年十二月十四日夜半、降りしきる白雪を蹴って吉良邸に討入り、炭小屋に身を隠す上野介を討ち取り、本懐を主君の墓のある泉岳寺に報告する。

一方、赤穂浪士四十七士を吉良邸に迎えて戦った吉良の侍の奮闘もめざましかった。その一人が、清水一学である。上野介の所領吉良に生れて、幼少より上野介を主君としてつかえた一学は四十七士と剣をまじえ、多数に傷を負わせたが、二十一歳の若き花の生涯を浪士の剣に散らせた。山車は、赤穂浪士を前に奮闘する清水一学の場面。

【新組町】

南部伝説（なんぶでんせつ）　七崎普賢院観音由来（ならさきふげんいんかんのんゆらい）

八戸市豊崎町七崎に、七崎普賢院がある。同寺は真言宗で、守本尊は普賢菩薩である。普賢菩薩は法華経を読誦すると六牙の白象王に乗った美女の仏身が現われて苦難を救う点では、法華教普門品（観音経）を誦唱すれば観音が苦難を救うのと同様である。日本では観音菩薩を女性とみなしていることが多い。現在、普賢院に身長二十糎弱の観音菩薩が安置されている。昔八太郎崎から流れついた観音様を、近くの七崎神社が合祀していたが、明治初年の神仏分離令で、観音様は普賢院に移された。このためか、七崎神社の祭礼のお浜入りが八太郎浜だったという。現在の八太郎海岸は沼も埋まり工場街と第二工業港に変身している。

伝説によれば、八太郎沼に大龍が住んでいて、毎年少女を人身御供にするように村に要求した。村の長者の美しい娘が、ある年人身御供に決まった。長者夫婦は目をはらして泣いた。都から来ていた公卿の姫が身代わりとなって、高櫓の上で法華経普門品を唱えていると、天を曇らせ、大

雨を降らせて沼から大龍が現われた。だが、七崎観音の仏法の力が守る姫に近寄れずに退散し消えてしまったという。山車はこの場面。七崎神社には市の天然記念物の杉の古木がある。また南祖坊の伝説があり、八太郎には八之太郎伝説も伝わる。

【類家】

赤穂浪士悲願達成（あこうろうしひがんたっせい）

元禄十四年三月勅使が下向するので、勅使接待役に浅野内匠頭長矩が、それに当ることになった。高家筆頭吉良上野介にその儀礼の教えを受けようとしたが、辱められたので殿中松の廊下で内匠頭が抜刀して上野介に切りつけた。公儀は鎌倉以来の武家の制度の喧嘩両成敗を破って、浅野だけは領地没収、切腹の片手落ちの処断が下された。城代家老大石内蔵助良雄等家臣四十七人は妻や子を捨て、親や愛しい人と別離して辛苦の末、翌十五年十二月十四日火事装束に身をかため、折から降りしきる雪を蹴って本所松坂町吉良邸に表門と裏門から二手に分かれて押し入った。とうとうと鳴り響く山鹿流陣太鼓に浪士の士気は上り、吉良家家臣と奮戦して、遂に炭小屋に隠れる上野介を討ち取った。「おう」「おう」と歓声をあげる浪士の歓声に、一年十ヶ月の苦節の宿願が達成された喜びの涙が光っていた。

【淀】

南部酒造助公大砲試射の場（なんぶみきのすけこうたいほうししゃのば）

造酒助（みきのすけ）は南部八戸藩八代藩主新真公の七男として、文化八年（一八一一）十二月十日に生まれた。母は琴。幼名は三千松といったが、後に造酒助と改名した。造酒助は文政九年九月十一日江戸で弓術師範吉田台蔵へ入門、同十一年九月六日に造酒助真勝は連枝待遇になって内丸の別殿を建ててもらい住まいとした。元保元年（一八三〇）八月十三日に造酒助は八太郎で、奥谷流砲術師範家老栃内要人について砲術の練習をした。当時は黒船が八戸沖に出没していた。

八月十八日、造酒助はまたまた八太郎崎で砲術の練習をすることになった。師範の栃内要人もそのかたわらにいて、大砲の整備をじっとみつめていた。造酒助は手にした火縄を点火した。最初の一発が轟然たる音をたてて八太郎の白砂の浜に砲身を粉砕して周囲に破片となって吹き飛んだ。その破片が造酒助の胸にぐさりと突き刺さり、鮮血は白砂に飛んで、静かに吸い込まれていった。太平洋の波は何事ないように打ち寄せて返していた。造酒助は若き十九歳の生命を悲しく閉じたのであった。山車はその場面。

【塩町】

火事と喧嘩は江戸の華

江戸時代の町火消しの大活躍である。江戸八百八丁当時の代名詞のようになっている「火事と喧嘩は江戸の華」があるように、庶民の財産を守るために活躍した火消したちの生命を賭けた義侠心を山車は見せてくれる。

ときは、八代将軍徳川吉宗公の時代、江戸町火消しが設置されて、名奉行大岡越前守忠相が、この火消しを応援する。「火事だ、火事だ」いろは四十七組の町火消しは、武家火消しと現場の先陣争いをする威勢のいい声は題名通りの江戸の華であった。火災の現場では決死の「まとい振り」で火消し一同は勇気を振るい起こして、火の延焼を防ごうと努力する。その精神は現在も消防に従事する人々の心に深く受け継がれている。

八戸藩でも二代藩主南部直政公が、五代将軍徳川綱吉公の側用人（現在の大臣格）となったとき七許可を得ている。その一つに火の見櫓があった。山車のめ組の火消しは、ご存知め組の辰五郎が登場している。辰五郎は江戸芝神明境内での春場所大相撲の力士と大喧嘩することが歌舞伎「神明恵和合取組」として残されてもいる。

【青年会議所】

十二支と守本尊

中国の古代暦法の定めに十干十二支がある。日本ではこれを「干支＝えと」と呼んでいる。中国の戦国時代に十干の甲を（木の兄＝え）乙を（木の弟＝と）としたことから兄弟としたものを「今日＝えと」と呼んでいるわけである。十干は甲乙丙丁戊己庚辛壬癸。十二支は子牛寅卯辰巳午未申酉戌亥で、これらを組合せて年月日、方位、時刻などを決めている。干は幹の陽、支は枝の陰にして五行の木火土金水を組合せて六十干支ともした。五行や十支は五本の指、十二支は十二ヶ月の季節の変化がヒントといわれる。

十二支は戦国時代に動物をあてはめたものだという。山の神様が十二支を決めるときに、一番先に来た順序にすることになったので、足の遅い丑が前日の夜から歩いて行って、日が昇るときに、「おれが一番だ」と、モーと声を上げると利功者のネズミが牛の背中から飛び降りて神様の前に出たので、子丑寅の順序が決まったという昔話があった。

年の守本尊は、子年＝千手観音、丑・寅年＝虚空蔵菩薩、卯年＝文珠菩薩、辰・巳年＝普賢菩薩、午年＝勢至菩薩、未・申年＝大日如来、酉年＝不動明王、戌・亥年＝八幡大菩薩。

【日商月金会】

楠正行（くすのきまさつら）　四條畷（しじょうなわて）の奮戦（ふんせん）

ときは南北朝時代。後醍醐天皇が崩御されて、後村上天皇が京都回復に努力しているころの正平二年（一三四七）足利尊氏の重臣高師直の大軍が吉野攻撃に出発した。これを知った楠正行は一族百四十三人をひきいて吉野山に登った。ときは十二月二十七日だった。決死の覚悟をした一族は先帝の如意輪堂に参拝して、壁に姓名を書き、その最後に「かへらじとかねて思えば梓弓　なきかずにいる名をぞとどむる」の辞世の歌をやじりで書きとめて、四條畷の決戦場にむかって進んだ。翌年一月三日高師直の本陣に突入した正行と弟正時はともに壮烈な戦死を遂げた。正行の年は二十二歳だった。

正行は正成の長子で、小楠公といわれ、嘉暦元年（一三二六）に生まれた。正成と正行の桜井の駅での別れは文部省唱歌となった。「青葉しげる桜井の駅での桜井の：中略・・正成涙をうちはらい、わが子正行呼び寄せて、なんじはここまで来たとても、とくとく帰れ故郷へ・・・」父子の涙の別れをした正行が父正行の意思を継いで、死出の合戦四条畷に突入して行った正行の心境はどうだったことだろう。山車は檜の上、何千本の矢をくぐり抜け、鬼神の大活躍をする楠正行。

【デーリー東北】

忍法竜虎の対決（にんぽうりゅうこのたいけつ）

昔から英雄、武将たちの対決には「竜虎相うつ」とか、「竜虎の対決」などという言葉がある。武力をもつ強者たちの代名詞に竜虎は使われている。

竜は、よく神話や伝説に登場し、天空を飛び、炎を吐く怪物とされている。竜は中国では四霊（麒麟、鳳凰、亀、竜）の一つで、古くから日本でも水神とされ崇拝されている。竜王は、インド住民の蛇神崇拝から生まれた架空の動物で、水中に住み、自由に空を飛び、雲を呼んで雨を降らす魔力を持つ水神、海神とされ、法華経序品に八大竜王がある。

虎はネコ科の食肉猛獣で、古くから絵や物語、伝説に登場する動物で、ライオンと並んで偉大なる動物の王である。「虎穴に入らずんば虎子を得ず」、「虎の尾を踏む」など、ことわざが多い。山車は、忍者たちの忍術くらべで、なかなか勝負のつかないという迫力に満ちた竜虎の対決の場面。

昭和四十九年（一九七四）

【廿六日町】

中将姫ものがたり・阿弥陀如来来迎の場

奈良県葛城市當麻の当麻寺は、二上山ふもとにある。同寺の蔵宝である阿弥陀如来の極楽浄土の図相をあらわしたつづれ織の当麻曼荼羅の掛物は、奈良時代につくられたものである。

この掛物にまつわる伝説「中将姫ものがたり」は、有名である。淳仁天皇の天平宝字七年「横はぎ大臣」といわれた藤原の豊成の娘中将姫は、幼い頃母紫の前を失った。継母は姫をにくんで、家来の喜藤太にいいつけて、宇陀の山奥雲雀山に捨てさせてしまった。喜藤太は涙ながらに考えて、可愛い娘を姫のかわりに山に捨てて、姫をわが子として育てた。いつか成人して十九歳になった姫を奈良の姫の家に連れて行くと、継母は驚いて、家を出てしまった。幼い頃からの苦労を思い出して、姫は当麻寺の尼となり、ハスのクキの糸で四、五平方米の曼荼羅を念仏を唱えながら織りあげた。これが当麻寺の寺宝となったもの。喜藤太の娘の墓は、宇陀郡の松林寺にある。山車は中将姫の祈りで阿弥陀聖衆が来迎している場面。

【上組町】

だるま大師と恵比寿大黒

山車は、物語を綴り合せて創作するところに面白さと斬新さを出す。だるまと恵比寿大黒さまの組み合わせた構想とした。

だるま（菩提達磨の略称）は、中国禅宗の開祖で、南インドの香至国王の第三子という。五世紀ごろ中国に入って苦労しながら嵩山の少林寺で、九年間壁に向って悟りを開いたという。これが面壁九年という故事を生んだ。大乗安心の法を説いた。それは誰でも仏になるべき性質を備えているといっている。日本に禅宗が入った頃は「達磨宗」といわれて、その頃達磨像が多く描かれて、人々に親しまれるようになった。

七転八起のだるまは、選挙に勝つと目を入れたりする。このだるまに赤い衣を着せたのは江戸の中期で天然痘のまじないのためだったといわれる。関東地方のだるま市、仙台の松川だるま、豊岡の目なしだるま、松山の姫だるまなど有名。養蚕、豊作、大漁、商売繁昌の縁起もの。恵比寿は鯛を釣る漁の神さま。米俵に乗って小槌をもつ大黒様は、恵比寿さまとともに七福神の二柱である。巨大な達磨を背景に、二柱の福の神の目出たづくしの山車。

【新組町】

日吉丸（ひよしまる）

関白太政大臣となって豊太閤といわれた豊臣秀吉は、安土桃山時代の武将で、幼名を日吉丸といった。尾張国中村で、天文五年（一五三六）に生まれて、慶長三年（一五八九）に没した。父は弥右衛門、母は天瑞院で、幼い頃、秀吉は、小猿と呼ばれ、日吉丸ともいわれた。七歳のときに織田信秀の足軽だった父が戦傷死したので、母は竹阿弥と再婚。八歳のとき光明寺に預かられたが、いたずら者だったので、寺から帰されてしまう。山車はその大あばれの場。その後十五歳のとき家出して松下加兵衛之綱につかえたが、大望を抱いていた日吉丸は、暇をとって家に帰るとき、三河矢作の橋にねていたそのとき、強盗蜂須賀小六と会ったという。墨俣城築城には、小六に助けてもらうなど、日吉丸と小六の出合いは、矢作附近のことだろう。木下藤吉郎となって織田信長につかえて、羽柴筑前守となって、近江六角攻め、伊勢平定、姉川合戦で軍功をたてた。中国征伐のとき、天正十年本能寺の変で帰り、明智光秀と山崎の合戦、柴田勝家を賤ヶ岳で破って、信長の後継者になって天下を統一した。

【糠塚】

柳生十兵衛三厳（やぎゅうじゅうべいみつよし）　山中修練の場（さんちゅうしゅうれんのば）

柳生十兵衛三厳は慶長十二年に、大和の柳生で生れた。初名七郎といった。父は柳生但馬守宗矩で、新陰流の達人だった。宗矩は大名剣豪といわれ、徳川秀忠に剣を教え、三代家光のときに大目付になった。

十兵衛は、秀忠の小姓となったが、三代家光のときに、勘気にふれて、追放されたというのは表向きの話で、その後は、徳川家のために諸国隠密の旅をしたという。

剣豪柳生十兵衛は、ときおりテレビに独眼で登場している。その剣の冴えは、悪人をばったばったと倒す痛快ぶりである。この十兵衛の弟子で有名なのが、決闘鍵屋の辻で、暁の三十六人斬りをしたという荒木又右衛門である。そして後に、柳生家を一緒に相続した弟宗冬も十兵衛に剣を教えられた。

山車は、柳生十兵衛が、剣の道を山中で烏天狗たちを相手に学んだというものである。

【鍛冶町】

舞楽（ぶがく）　番舞（つがいまい）

舞楽陵王は、奈良時代に中国大陸から輸入されたもので、朝廷で正月万歳などとともに舞うめでたいものであるとい

う。太鼓、かねの音楽で舞うもので、舞楽面は独特の芸術性をもっている。陵王は、金翅鳥が竜王を殺そうとしたのを菩薩が救うという物語が竜王の舞いの曲となっている。

舞楽は雅楽の伴奏で行われる舞踊をいい、雅楽は平安時代に日本で改作された。中国伝来の雅楽を唐楽系の左方といい、朝鮮から伝来のものを、高麗系の右方といい二種類ある。舞いの人数は踊る曲によって決まる。一人舞（陵王、抜頭）、二人舞（納蘇利、青海波）、四人舞（太平楽、万歳楽）六人舞もある。古くは女舞もあったが現在は男舞が多い。役によって仮面が違う。番舞は、左舞一つに、右舞を組合せたもので、山車は陵王の一人舞に、二人舞を組合せている。

中国に長恭という武士がいて、いつも戦場に出かけたときに、面をかぶって大活躍をした。人々はこの勇ましい長恭の活躍をたたえて舞ったのが、陵王の曲舞のはじまりともいう。

山車は、その舞楽番舞を祭にみせてくれる。

【下大工町】

水滸伝（すいこでん）　九紋龍と花和尚の戦いの場（くもんりゅうとかおしょうのたたかいのば）

中国の時代長編小説水滸伝は、享保のころから、「忠義水滸伝」百回（百章）ものが訳本になって紹介され、広く読まれている。山東の梁山泊という湖水を背景にして起きた数々の事件を集録したもので、小説だけに、歴史的事実に創作の部分も多く加えられている。

徽宗皇帝の宣和三年（一一二一）に、准南の盗賊宋江らが、地方を荒し回ったので、これを捕えようと朝廷から出兵したが、宋江ら三十六人は強くて、歯がたたなかった。それをいいことに、宋江らは開封の東から揚子江の北一帯まで荒したが、最後に州知事に帰順したという。この物語が、人々の語り草となって、数多い物語を生み出し、芝居になったりして、大規模な内容にふくれ上った。これを水滸伝として集大成させたのが施耐庵といわれている。

悪政治家たちのために罪におとし入れられた人々が正義のために戦う百八人の豪傑。高球と林中の対決、虎殺し武松、史進、魯智深の活躍は手に汗を握らせた。山車は万里の長城を背景とし、のちに、百八人の仲間になるとは知らずに戦う二人の豪傑。体に九匹の龍の刺青のある九紋龍史進と全身に花の刺青ある僧、花和尚こと魯智深の戦い。数多く錦絵に描かれている。名場面である。

【デーリー東北】

寿子守大黒（ことぶきこもりだいこく）

大黒さまは、インドから日本にやって来た民間信仰の神さまで七福神＝恵比須、大黒、弁財天女、毘沙門天、寿老人、布袋和尚、福禄寿の中で、恵比須さまと並んでもっと

も人気のある福神である。山車大黒様は、頭巾をかぶって小槌を持って、米俵の上に乗って、中国の子供たちの子守をしながら楽しく遊んでいるところである。現代版保育所の保母さんが大黒様となっている場面。古代インドでは、闇黒神だったが、仏教にとり入れられて、鬼神荼吉尼を降伏させた三面六臂の忿怒神と大黒は考えられるようになったが、そのため戦勝守護神となった。また厨房（ちゅうぼう）の神ともいわれ、寺院の台所に安置されるようになってから、台所の神様となった。田の神ともなっている。当地方では豊年祭（えんぶり）には、小槌を振って、「大黒舞をみっさいな。・・・一に俵をふまえて・・・。」と舞う大黒舞がある。家に入って大黒柱となっている大黒天は、庶民に愛される福神である。

【八戸職員互助会】

大阪夏（おおさかなつ）の陣（じん）

慶長十九年（一六一四）十一～十二月、元和一年四～五月の徳川方が豊臣氏の大阪を攻めた戦いを大阪の陣といい、慶長を冬の陣、元和を夏の陣という。関ヶ原の戦いで全国統一をした徳川家康にとって、大阪城の秀頼、淀君は目の上のたんこぶだった。家康は豊臣系の大名を離反させて、豊臣家に社寺の造営をすすめ、資金の浪費をさせた。慶長十九年京都方広寺の梵鐘に「君臣豊楽、国家安康」の銘があった。それは家康をのろったものであると口実をもうけて、大阪城を攻撃したが、堅固な城をどうにも出きず、謀略によって和議を結んで、大阪城の堀を埋めさせた。大阪方に集まった浪人は堀を埋めたことを怒っていた。京都所司代は、これを戦争準備と徳川に報告。浪人を追放しろという徳川方からの申入れに、豊臣方は、浪人の勢力増大で聞き入れることが出来なかった。翌十五年夏の陣では、豊臣方の城は防備力を失い、摂津、河内、和泉の野戦に連敗した。五月六、七日の決戦では後藤又兵衛、薄田隼人、木村重成、幸田幸村の奮戦失しく二万人を失った。

元和一年（一六一五）五月七日の夕方、大阪城は炎上し、翌八日秀頼母子は自害した。淀君四十九歳、秀頼二十三歳だった。

昭和五十年（一九七五）

【吹上】

弘安（こうあん）の役（えき）・日本水軍統帥（にっぽんすいぐんとうすい）

河野通有（こうのみちあり）の大奮戦（だいふんせん）

蒙古襲来にたちむかって指揮をとったのが北条時宗である。時宗は建長三年（一二五一）五月、時頼の嫡子として

生れ、十八歳から実権をにぎり三十四歳の若さで心労のあまりに没した。蒙古から第一回の使者が九州大宰府に着いたのが文永五年（一二六八）正月。元の国書は貿易を求めていたが、最後に兵力云々とあった。朝廷は返事の必要なしといった幕府は挙国一致で国防に当るよう西国に防衛体制をとらせた。文永八年三度目の蒙古使者を追い返した。

文永十一年十月、突如元軍は対馬、壱岐を蹂りんして博多湾に侵入した。迎え討つは守護守小弐景資を中心とした菊地、白杵、小玉、松浦の九州豪族一万。火器を使う近江戦の元軍二万に苦戦の末水城の城まで退いた。元軍も元船に帰ったその夜暴風雨が吹き荒れ、翌朝には海岸には元船の影もなかった。時宗は四度目の元使者を斬った。寺社では敵国降伏祈願をした。弘安四年（一二八一）元軍十四万は四千艘で九州に押し寄せた。一時上陸したが河野通有らの活躍で撃退され、二十日ばかり海上に漂った。閏七月一日大暴風雨のため元の軍船は海のもくずとなった。人これ呼んで「神風」といった。いまに残る「アモコ」もその蒙古への恐れの一つの言葉である。山車は奮戦する河野通有の奮戦の場。

【鍛治町】

汐汲（しおくみ）

汐汲は長唄舞踊曲で、江戸時代末期に流行した組曲風舞踊である。舞踊で華麗な人形になっているものは、汐汲、藤娘、娘道成寺がある。汐汲の舞踊は能の松風をもとにしたもの。

松風は能の曲名で、古くは「汐汲」「松風村雨」などといった。観阿弥の原作を世阿弥が改作、歌曲や歌舞伎脚本にも作られている。須磨の浦で旅僧が、昔、在原行平に愛された松風、村雨姉妹の霊を旧跡の松を見て弔う。やがて秋の日も暮れて、月光を浴びて二人の汐汲の海女が帰ってくる。その海女に宿を頼み、供養した松の話を物語ると、松風は恋慕の情が募って、涙を流して、自分たちが亡霊であること打明け、行平が残した烏帽子、狩衣をつけて舞う。旅僧の一場の夢はさめ、ただ波の音と松風の声ばかりだった。行平のことは「古今和歌集」に歌が残されている。山車は華麗な歌舞伎舞踊汐汲。

【内丸】

シャム国（しゃむこく）の山田長政（やまだながまさ）

山田長政は駿河の国（静岡県）に生れたが、その生年月は不明である。染物屋に育った長政は、沼津で武芸にはげみ、慶長十六年（一六一一）頃朱印船に密航して台湾に行き、八幡大菩薩ののぼりをたてて海賊船と戦いシャム（タイ）のアユタヤに着いた。ここは五百人の日本人が住むに日本人町だった。町長城井文右衛門の世話になって、その

後町長になった長政のところに六昆（リゴール）の大軍に攻められたシャムのソンタム王が、助けを頼みにきた。長政は二百の兵をひきえて「一万の日本軍ここにあり」と大奮戦して二万の大軍を追い散らし、次いで十万の軍を全滅させた。その功によって長政はシャム王から六昆王に任命され、国王の信任も厚く、シャム王の王妃を妻にし最高の官位についた。ところが王の没後王位継承の内乱が起きて、王族オヤ・カラホムの奸計によって毒殺された。時は徳川三代将軍家光の頃だった。

生前長政は象に乗り日本の鎧、兜に身を固めて奮戦したことは今の世でも語り草になっている。日本との親交に努めた長政の在りし日の姿を山車は再現した。

【十一日町】

宮本武蔵巌流島の決闘（みやもとむさしがんりゅうじまのけっとう）

剣豪宮本武蔵と佐々木小次郎が慶長十七年（一六一二）四月十三日、小倉巌流島（船島）での決闘は、朝日の中にくりひろげられる。舟で船島におくれて着いた武蔵に、待ちに待っていらだった小次郎は船からひらり飛び降りるのを待って打ちかかってゆく。ひらりと体をかわして飛び上った武蔵の木刀が小次郎の額に打ち下ろされると、若き十八歳の小次郎の燕返しも空しく倒れてしまう。あまりにも有名になった二人の宿命の雌雄決定の対決だった。山車はその場面。

宮本武蔵は天正十二年（一五八四）に生れ、十三才で有馬喜兵衛という兵法者に勝ち、十七歳のとき関が原合戦に出陣した。二十一歳京に上り、諸国武者修行に出て、吉岡憲法、宝蔵院、夢相権之助を倒し、六十余の試合で一度も敗れたことがなかった。小次郎と試合の後熊本藩細川忠利に任えた。

佐々木小次郎は燕返して有名な美男剣豪である。越前宇阪に生れ、富田勢源に学び、三尺余りの大刀を使い門中右に出るものはなかった。勢源の弟治部左衛門に勝ち諸国修行の旅に出て、豊前小倉細川忠興に任え、船島に散った。武蔵二天流祖。小次郎巌流祖といわれる。

【塩町】

大岡越前と町火消し（おおおかえちぜんとまちひけし）

大岡越前守忠相は名奉行としてテレビや映画に登場した江戸中期の町奉行である。最初伊勢山田奉行のとき紀州松阪と山田で境界争いがあったとき、紀州の権力に恐れずに正しい裁きをしたので、吉宗が八代将軍になったとき、大岡越前守を江戸奉行に抜擢した。奉行としての越前守は各種改革をし、裁判も公正を期したために「大岡さばき」の数多い作話を生み、庶民からもてはやされた。天一坊、白木屋お熊、直助権兵衛、雲切仁左衛門などの大岡裁判の大

岡政談は有名。数多くは数人の講釈師によって作られたもの。大岡越前は延宝五年旗本大岡弥右衛門忠高の第四子に生まれ、大岡忠真の養子になった。火事と喧嘩は江戸の華。いつも江戸は火事に悩まされた。定火消、方角火消、大名火消があったが、享保三年（一七一八）越前守は町火消制度をつくり、いろは四十八組一万人の町火消しが誕生し、享保五年に纏が許された。

【青年会議所】

竜虎の戦い（りゅうこのたたかい）

竜は、神話や伝説に登場するヘビやトカゲを合わせたような大怪物で天上を飛び、人間にすべて心を見抜くとされている。春の農耕期は竜神が雨乞いの神として祈られたりした。水神としての竜神は雲を呼び、雷雨を降らせる力を持っているという。竜は川神であるとともに海神ともなっている。

虎は食肉目ネコ科の猛獣でアジアに広く分布している。水泳も上手で、満腹してもなお相手を殺す習性があるという無類の野獣である。寿命は二十五年位。年のとった虎は「人食い虎」と恐れられる。絵や伝説に出てくる動物で、加藤清正や和藤内の虎退治など有名。「竜虎相うつ」といえば、強い武将たちの戦いの表現である。竜虎の戦いは、いつの時代にもある。山車は、竜と虎のみの人形を使わない斬新な山車。

【ＰＧ日商月金会】

極楽（ごくらく）

極楽浄土とは安楽の世界で阿弥陀仏の浄土の名である。西方十万億土を過ぎたところに浄土の国を建設したといい、その地下地上、虚空は荘厳にして、微をきわめ妙を尽して、光明は常に輝き、気候は温順で、水鳥、樹林は法音をのべて、すべて苦労もなく物質精神面は、みな満足すべきことだらけという。美しく楽しい極楽絵図は考えてみるだけで楽しい。極楽が西方にあるといったのは、日が没するのが西のため生命の終りを考えたものという。宗教によっては、浄土極楽は、自分たちの心の中にあるという説を唱えるものもある。

ヤーレお祝
〃今年や世が良うて
三社の祭り
〃丘は満作
浜又大漁

松和貴

（八戸三社大祭木遣り音頭）

山車繪図帳

山車繪師　夏坂和良

諫鼓鶏

（明治時代）

かんこのとり

・中国伝説、施政について諫言しようとする人民に打たせる鼓。
だが、誰も打つ者は無く鶏の遊び場と成り「天下泰平の象徴」と言われる。日本では古典的山車。

武蔵野の月

（明治時代）

むさしののつき

・月の名所は様々歌に唄われる。
　月にススキ、花に蝶、そしてしだれる波。

・女武者、鬼神に勝る巴御前の大奮戦。

巴御前鬼神の絵（昭和四十年代）

さかぐちりきさくのぎ

大坂冬の陣（昭和四十年代）

おおさかなつのじん

・若武者木村重成、大坂夏の陣の奮戦の場。

・乙姫様から貰った玉手箱をお土産に竜宮城から帰る浦島太郎。

浦島太郎さんの巻物　（昭和四十年代）

うらしまたろうとおとひめさま

八岐之大蛇

（昭和四十年代）

やまたのおろち

・八つの頭、八つの尾を持つ八岐之大蛇を須佐之男命が神酒を使い退治し、奇稲田姫を助ける神世の話。

弁辨天と福の神

（昭和四十年代）

べんざいてんとふくのかみ

・七福神の紅一点、芸能の神弁財天と恵比寿、大黒の福の神。

猿蟹合戦

（昭和四十年代）

さるかにかっせん

・蟹をいじめる悪い猿を、臼や栗や蜂達が懲らしめる。

大江山酒呑退治

（昭和四十年代）

おおえやましゅてんたいじ

・大江山の鬼、酒呑童子を源頼光と四天王が山を分け入り退治する。

石橋山合戦の武者絵山車

（昭和四十年代）

なんぶさぶろうみつゆきいしばしやまのたたかい

・南部氏の始祖、光行は石橋山にて戦功を挙げ甲斐国、そして陸奥国を拝領となる。

南総里見八犬傳

（昭和四十年代）

なんそうさとみはっけんでん

・庚申山の化け猫を犬飼現八と犬村角太郎が退治する。八犬伝の一幕。

大鯛と宝の前で舞い踊る

（昭和四十年代）

しょうがつのえびす・だいりへまち

・めでたいお正月に現われた二柱の福の神、大鯛と宝の前で舞い踊る。

源平合戦の一場面。

・一ノ谷の絶壁を馬上の義経軍団が平家の陣に奇襲をかける。

一ノ谷の絶壁 義経の逆落とし

（昭和五十年代）

りょうのたにのまっしゅう　ひよどりごえのぎけいおとし

元寇の役・四艘の軍船絵巻

（昭和五十年代）

げんりつのえき・にしられんとあうりしゅうらい

・日蓮の祈祷は神風を呼び蒙古数万の軍船は次々と波に呑まれていく。

七福神

（昭和五十年代）

しょうへいじん

・福の神の七福神が笛や鼓で舞い踊る。鶴や亀も現われて、目出たい舞遊の場。

鍋越物語図 （昭和五十年代）

ごいごしょうじえまき

・紀州、安珍清姫の伝説、歌舞伎迴成寺物を集結させた。

義経千本櫻・川連法眼館の狐忠信

（昭和五十年代）

よしつねせんぼんざくら・かわつらほうげんやかた
のきつねただのぶ

・義経より親の皮で作られた初音の鼓を貰い喜び帰る狐忠信、
実は源九郎狐。

義経の弓流し（昭和五十年代）

よしつねのゆみながし

・海上決戦屋島の戦い。義経は誤って海に弓を流してしまう。平家はここぞとばかりに義経を攻め立てる。しかし、無事に弓を取り戻す。

・七福神と唐子達が楽しく遊ぶ。天馬の馬車や鶴に乗って空に舞い上がる小槌と鯛を恵比寿・大黒様に奉納す。

七福神と唐子達が楽しく遊ぶ

（昭和六十年代）

しょうへいさんらいのきのは

綾・七つ面（昭和五十年代）

しん・ななつめん

・歌舞伎十八番七つ面を創作、美女に七福神の面を持たせ十二支を配置した。

・天竺に向う三蔵法師一行。竜魔王が襲いかかる。三面六臂の孫悟空が大奮戦。分身猿も大活躍の場。

国盛記・孫悟空竜魔王の巻

（昭和五十年代）

さりゆうまい・さとうしんすけ　のぼり

八戸三社大祭縁起
三社祭礼と獅子頭と番傘祭礼
大漁多聞・紙屋町

（昭和六十年代）

はちのくさんしゃたいさいえんき
さんしゃさいじんとのむらぐんき・おおさわたもん

・三神社の御祭神と祭を育てた野村士と大澤士。姫達が八戸の象徴を持って舞い踊る八戸三社大祭の縁起。

五穀豊穣・祈・大かがり火招運の舞

（昭和六十年代）

ごこくほうじょう・えんぶり・だいかがりびしょう
うんのまい

・鶴亀に乗り恵比須大黒がかがり火を点火。その御前でえんぶり摺りが始まった。

七福神の山車引・法霊御神事行列

（昭和六十年代）

しちふくじんのだしひき・
ほうりょうごしんじぎょうれつ

・七福神が江戸時代の屋台形の山車を引き出すと法霊様が現われ見守る。

南部八百年を寿ぐ
産土の神と机伝説・橘藤九郎盛國

（平成初年代）

なんぶはっぴゃくねんをことほぐ・うぶすなのかみと
えんぶりでんせつ・たちばなとうくろうもりくに

・平成元年南部八百年記念山車。えんぶり元祖橘藤九郎と売市机組が殿様の御前でえんぶりすりをすると田の神様が舞い降りた。

大願成就・一富士二鷹三茄子
八王子市の豪華を願う（平成初年代）

たいがんじょうじゅ・いちふじにたかさんなすび
はちのくしみんのこうふくをねがう

・正月の吉例歌舞伎は矢の根五郎の曽我物。初夢の一富士二鷹三茄子と目出たづくしの山車。

名圖岐蘭・白蛇伝

（平成初年代）

さゆうこうへいまちけ・はへじゃこと

・蛇が人間を恋慕う物語。命を助けてもらった人を慕い、修業の末白蛇はお嬢様に変身して夫婦となり暮し始めたが…

関 俊 彦（平成初年代）

りくせんや

・父は中国、母は日本、父の祖国籠城に渡った和唐内、虎を家来に剛力無双の活躍。

伊吹山（平成初年代）

スーパー歌舞伎・ヤマトタケル

すーぱーかぶき・やまとたける・いぶきやま

・帝の命により最後の戦に挑むヤマトタケル。伊吹山の山神、姫神との戦いが始まった。

義経奥州・義経北の海

（平成初年代）

きたのよしつねでんしょう・えそとかい

・人目を忍んで平泉から北上した義経主従。波荒い津軽海峡に立ち往生した。巨岩に座り三日三晩祈ると白髪の神が現われ三頭の龍馬を与えた。

西遊記・斉天大聖孫悟空と蓮華洞の妖魔

（平成年代）

さいゆうき・せいてんたいせいそんごくうとれんげどうのようま

・蓮華洞に住む金角、銀角大魔王。三蔵法師達を襲うが、呼んで答えれば吸い込まれる瓢箪で孫悟空がやっつける。

説経師・説教節ゆかりの説話

（平成年代）

しょうもんし・せっきょうぶしよりそんしょうだゆう

・中世に流行った説経師。唱門師によって語り繋れる。悪の山椒太夫に引き離される母と子。安寿と厨子王の悲しい物語。

下北伝説・矢の根八幡

（平成年代）

しもきたでんせつ・やのねはちまん

・下北の伝説、住民を困らせる鬼神。都の武将 源頼義が八幡の神の助けにより、神弓にて退治する。箭根森八幡宮縁起。

八戸がまんに歌舞伎の夢

和川家地

スーパー歌舞伎・紅葉伽羅（平成初年代）

はちのくがうんだかぶきのほし・いちかわえみや
すーぱーかぶきあいつとめもうしそうろう

・八戸出身の歌舞伎女形、スーパー歌舞伎の六つの姫役を山車上に再現。

平家の亡霊・知盛推参

（平成年代）

へいけのぼうれい・とももりすいさん

・壇ノ浦で滅亡した平家一門。大物ノ浦から船出した義経一行に亡霊となって襲いかかる平知盛と平家の公達。

源頼光大江山凱旋

（平成年代）

みなもとのらいこうおおえやまがいせん

・悪行三昧の鬼神、大江山の酒呑童子を源頼光と四天王達が退治した。鬼の首を車に乗せ、姫達を助けて都に凱旋する。

歴史浪漫八戸義経伝説・義経正妻北の方・法霊大明神

（平成十年代）

れきしろまんはちのへよしつねでんせつ
よしつねせいさいきたのかた・ほうりょうだいみょうじん

・平泉高舘から隠れ逃れた義経一行は北へ向う。義経の正妻北の方久我御前の霊は一行の無事を守護するのだった。

今昔桃太郎

（平成年代）

いまはむかし　ももたろう

・桃太郎のその後の話。今は見るに堪えない桃太郎、そこへ鬼達が復讐に来た。桃の精に諌められた桃太郎、心体を鍛え直し、年老いた雉と犬、猿の子孫をお供に再び鬼ヶ島へ向う。

坂上田村麻呂・陸奥ノ国・霧山の鬼征伐

（平成年代）

国重要無形民俗文化財
八戸三社大祭山車絵図

さかのうえのたむらまろ・
むつのくに・きりやまのおにせいばつ

・伊勢国鈴鹿山で一度は敗れた妖鬼大獄丸は再び蘇り、陸奥国霧山での戦いとなった。神仏の守護を受け、田村麻呂と鈴鹿御前がついに退治する。

八戸藩開藩三百五十年記念・八戸三社大祭新羅神社武者行列由来

（平成年代）

はちのへはんかいはんさんびゃくごじゅうねんきねん・
はちのへさんしゃたいさいしんらじんじゃむしゃぎょうれつゆらい

・野村軍記が始めた三社大祭の武者行列。新羅神社の祭神、新羅三郎義光命が見守る。

戸隠山の鬼女・鬼揃紅葉将

（平成年代）

とがくしやまのきじょ・おにぞろえもみじがり

・戸隠山に住む鬼女更科の前、美女に化して平維茂を襲う。
山の神の神力を借り、神刀で退治する。

変化道成寺

（平成年代）

へんげどうじょうじ

・唐より日本国を乗っ取ろうと白拍子に化して現われた白面金毛九尾の狐。ムジナの押し戻しが現れ、睨み合う歌舞伎舞踊の一幕。

北方の神・毘沙門天・邪鬼を誅す
～北行義経を守護する～
（平成年代）

ほっぽうのかみ・びしゃもんてん・じゃきをちゅうす
～ほっこうよしつねをしゅごする～

・寅年生まれの北の守護神毘沙門天、北を目指し旅をする義経一行の北行伝説。

神女七福獅・壽柱建之躰

（平成年代）

しんにょしちふくぞろえ・ことぶきはしらだてのてい

・七柱の美神が七福神の姿となり宝船に乗る。七福神は大きな壽の文字を組み立てる目出たい場面。

蓬莱山 ～不老長寿の神仙境～

（平成年代）

ほうらいさん
～ふろうちょうじゅのしんせんきょう～

・吉兆の山、蓬莱山、不老不死の仙人の集う島、龍、鳳凰、虎、鯉、獅子に乗る神仙の伝説。

三社御祭神の御前にて七福神山車を引き出す躰（平成年代）

さんしゃごさいしんのごぜんにてしちふくじんだし
をひきだすてい

・三神社の御祭神の前で七福神と類家山車組の人達が昭和43年１位を受賞した八犬伝の山車を引出す場面。

参考文献

「はちのへ祭　山車ものがたり」　はちのへ出版社（絶版）

天満宮御神　御迎船人形図会　東方出版（一九九六年）

祭礼・山車・風流　近世都市祭礼の文化史　四日市市立博物館（一九九五年）

日本の美術　第五一六号山車　株式会社ぎょうせい（二〇〇九年）

四〇〇年目の江戸祭禮　その風景と情熱の人々　武蔵野書院（二〇〇四年）

博多山笠　博多祇園山笠振興会（二〇〇四年）

八戸三社大祭文化財調査報告書　青森県八戸市教育委員会（二〇〇二年）

江戸時代の八戸三社大祭・三浦忠司　普及啓発資料　ＡＤＡＣ・インフォコム株式会社八戸ワークスペース（二〇一六年）

概説八戸の歴史双書　八戸三社大祭　工藤竹久　八戸市（二〇一六年）

平成28年度文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした地域活性化事業）
八戸市の文化遺産を活用した地域活性化事業

事業実施／あおもりデジタルアーカイブ・コンソーシアム
事業監修／八戸市教育委員会

普及啓発資料

八戸三社大祭
明治からの山車ものがたりと山車繪図帳

発行日　平成 29 年 2 月 1 日
著　者　夏　坂　和　良
発行者　あおもりデジタルアーカイブ・コンソーシアム（略称：ADAC）
（本事業事務局）
インフォコム株式会社　青森八戸オフィス
〒031-0041　八戸市廿三日町28　八戸ウェストビル
TEL（0178）20－9641　FAX（0178）20－9642
印　刷　新光印刷株式会社
〒031-0813　八戸市大字新井田字鷹清水9-11
TEL（0178）34－5331　FAX（0178）34－6078